

薄紅梅

泉鏡花

青空文庫

こうじまち 麴町 九段——なかざか 中坂は、むさしあぶみ 武蔵燈、えどすなご 江戸砂子、そうかのこ 惣鹿子等

によれば、いや、そんな事はどうでもいい。このあたりこそ、明治時代文芸発程の名地である。かつて文壇の梁山泊りょうざんぱくと称えられた硯友社けんゆうしゃ、その星座の各員が陣を構え、塞頭さいとう高らかに、我が楽多文庫らくたぶんこの旗を翻ひるがえした、編輯所へんしゅうじよがあつて、心織筆耕の花を咲かせ、綾あやなす霞を靉靆たなびかせた。

若手の作者よ、小説家よ！……あつぱ 天晴れ、と一つ煽あおいでやろうと、扇子を片手に、当時文界の老將軍——さくら 佐久良藩の碩儒せきじゆで、むか

し江戸のお留守居と聞けば、武辺、文道、両達の依田よだ学海翁が、
ある一夏土用の日ひざかり盛さかの事……生平きびらの揚羽蝶の漆紋しつもんに、袴はかま着用、大刀
がわりの杖を片手に、芝居の意休を一ゆがきして洒さつぱり然ぜんと灰汗あくを
抜いたような、白ひげい髯さわやかしごを、爽さわやかに扱かきながら、これ、はじめての見
参。……

「頼む。」

があいにく玄関も何も無い。扇を腰に、がたがたと格子を開け
ると、汚い二階家の、上も下も、がらんとして、ジイと、ただ、
招魂社辺の蝉せみの声こゑが遠く沁しみこ込む、明放しの三間ばかり。人影も見
えないのは、演義三国誌常套手段おきまりの、城門じやうもんに敵あざむを詭あざむく計略。そこ
は先生、武辺者だから、身構えしつつ、土間取附とつつきの急はしごな階だ子

段んを屹きつと仰いで、大音に、

「頼もう！」

人の氣勢けはいもない。

「頼もう。」

途端に奇なる声あり。

「ダカレケダカ、ダカレケダカ。」

その音おん、まことに不気味にして、化猫が、抱かれない、抱かれない、と天井裏で鳴くように聞える。坂下の酒屋の小僧なら、そのまま腰を抜かす処を、学海先生、杖の手に気を入れて、再び大音に、

「頼む。」

「ダカレケダカ、と云つてるじゃあないか。へん、野暮め。」

「頼もう。」

「それいつも、一つ、タカノコモコ、と願いたいよ。……何しろ、
よねはち あだきち 米八、仇吉の声じやないな。彼女等には梅柳というのが春だ。
夏やせをする質だから、今頃は出あるかねえ。」

「頼むと申す……」

「何ものだ。」

と、いきなり段の口へ、青天の雷神が倒めつたように這身で
大きな頭を出したのは、虎の皮でない、木綿越中の素裸——
ちよつと今時の夫人、令嬢がたのために註しよう——唄に……

……どうすりや添われる縁じややら、じれつたいね……

というのがある。——恋は思案のほか——という折紙附の格言がある。よつてもつて、自から称した、すなわちこれ、自劣亭じれつてい思案外史である。大学中途の秀才にして、のぼせを下げる三分刈の巨頭は、入道の名に謳うたわれ、かつは、硯友社の彦左衛門、と自から任じ、人も許して、夜討朝駆に寸分の油断のない、血氣盛ざかりの早具足なのが、昼寝時の不意討に、蠅はえたたき叩もとりあえず、ひたと向合つた下土間の白い髯を、あべこべに、炎天九十度の物干から、僧正坊が覗のぞいたか、と驚いた、という話がある。

おなじ人が、金三円ばかりなり、我楽多文庫売上の暮近い集金の天保銭……世に当百ときこえた、小判形が集まったのを、引攫って、目ざす吉原、全盛の北の廓へ討入るのに、鑊の数ではないけれども、十枚で八銭だから、員数およそ四百枚、袂、懐中、こいつは持てない。辻、俣の蹴込へ、ドンと積んで、山中坂へ、ありやありやと、俣夫と矢声を合わせ、切通あたりになると、社中随一のハイカラで、鼻めがねを掛けている、中山高、洋服の小説家に、天保銭の翼が生えた、緇束を両手に、二筋振って、きおいで左右へ捌いた形は、空を飛んで翔けるがごとし。不忍池を左に、三枚橋、山下、入谷を一のしに、土手へ

飛んだ。……当時の事の趣も、ほうけた鼓草たんぼほのように、散つて、残つてゐる。

近頃の新聞の三面、連日に、偷盗ちゆうとう、邪淫じゃいん、殺傷の記事を読む方々に、こんな事は、話どころか、夢だとも思われまい。時世は移つた。……

ところで、天保銭吉原の飛行ひぎようより、時代はずつと新しい。——ここへ点出しようというのは、件くだんの中坂下から、飯田町通どおりを、三崎町の原へ大斜めに行く場所である。が、あの辺は家々の庭背戸が相応に広く、板塀、裏木戸、生垣の幾曲り、で、根岸の里の雪の卯うの花、水の紫陽花あじさいの風情はないが、木瓜ぼけ、山吹の覗かれる窪地の屋敷町で、そのどこからも、駿河台するがだいの濃い樹立の下に、

和仏英女学校というのの壁の色が、こがらし 風の吹く日も、暖かそうに霞んで見えて、裏表、露地のところどころ 処々から、三崎座の女芝居の景気のぼり、あかね 幟が、あさぎ 茜、浅黄、青く、白く、また曇ったり、濁ったり、その日の天気、時々なびの空の色に、ひらひらと風次第に靡くが見えたし、場処によると——あすこがもう水道橋——三崎いなり稻荷の朱の鳥居が、物干場の草原だの、あさり、しじみ 浅蜆、蜆の貝殻の棄てたも交る、空地を通して、その名の岬に立ったように、土手の松に並んで見通された。
 ……と見て通ると、すぐもう広い原で、屋敷町の屋敷を離れた、やなみ 家並になる。まだ、ほんの新開地で。

そこいらに、小川という写真屋の西洋館が一つ目立った。隣地の町角に、平屋建だての小料理屋の、夏は氷こおりみせ店になりそうなのが

あるのと、通りを隔てた一方の角の二階屋に、お泊宿の軒行燈のきあんどんが見える。

お泊宿から、水道橋の方へ軒続きの長屋の中に、小さな貸本屋の店があつて……お伽堂とぎだう……びら同然ぎつの粗な額がが掛けてある。

お伽堂——少々気になる。なぜというに、仕入ものの、おとしの浅い箱火鉢の前に、二十六七の、色白で、ぽつとりした……生際はちつと薄いまるまげが、桃色の手柄の丸鬚まるまげで、何だか、はれぼったい、まぶた瞼をほんのりと、ほかほかする小春日の日当りに表を張つて、客欲しそうに坐っているから。……

羽織も、着ものも、おさすりらしいが、やわらか柔やわらかずくめで、まえだれ前垂まえだれの膝も、しんなりとやわらか軟やわらかい。……その癖半襟を、あご頤あごでお圧おすばかり包ま

しく、胸の紐の結びめの深い陰から、色めく浅黄の背負しよいあげ上が流れたようにこぼれている。解けば濡れますが、はい、身はかたく緊しめて包んで置きます、といった風容ふうよう。……これを少々気にしたが悪いだろうか……お伽堂の店番を。

三

何、別に仔細しさいはない。客引に使った中年増でもなければ、手輕な妾めかけが世間体を繕つくっているのでもない。お伽堂というのは、この女房の名の、おときをちよつと訛なまったので。——勿論亭主の好みである。

つい近頃、北陸の城下町から稼ぎに出て来た。商売往来の中でも、横町へそれた貸本屋だが、亭主が、いや、役人上りだから主人といおう、県庁に勤めた頃、一切猟具を用いず、むずと羽搔はがをしめて、年紀としは娘にしてい、甘温、脆膏ぜいこう、胸白むなしろのこの鴨かもを貪食した果報ものである、と聞く。が、いささか果報焼けの気味で内臓を損じた。勤労に堪えない。静養かたがた女で間に合う家業でつないで、そのうち一株ありつく算段で、お伽堂の額を掛けたのだそうである。

開業当初のつけに、僥倖ぎょうこうにも、素晴らしい利得もうけがあつた。

「こちらじゃ貸すばかりで、買わないですか。」

学生が一人、のっそり立ち、洋書を五六冊引抱ひんだいて突立つたつたも

のである。

「は、おいで遊ばしませう。」

と、丁寧な、三指もどきのお辞儀をして、

「あの、もしえ。」

と初々しいほど細い声を掛けると、茶の間の悪く暗い戸棚の

前で、その何かしら——内臓病者補壯の食はまだ考えない、むぐ

むぐ頬張っていた土族元はげの胡麻塩ごましおで、ぶくりと黄色い大面おおづらのち

よんびり眉が、女房の古らしい、汚れた半帕ハンケチを首に巻いたのが、

鼠色の兵子帯へこおびで、ヌーと出ると、捻ひねつても旋ねじつても、眈めじりと一所に

垂れ下る髯とっさきの尖端を、グイと揉もみ、

「おいでい。」

と太い声で、右の洋冊ようしよを横縦に。その鉄壺かなつぼまなこ眼ねで……無論
読めない。貫目を引きつつ、膝のめりやすを溢出はみださせて、

「まるで、こりや値になりませんぞ。」

原著者は驚いたろう。

「しかし買うとして、いくらですか。」

——途方もない値をつけた。つけられた方は、呆れるより、いきなり撲なぐるべき蹴倒し方だったが、傍かたわらに、ほんのりしている丸鬚まげゆえか、主人の錆びた鋏びようのような眼色めつきに恐怖おそれをなしたか、気の毒な学生は、端銭はしたを衣兜かくしに捻込ねじこんだ。——三日目に、仕入の約二十倍に売れたという

味をしめて、古本を買込むので、床板を張出して、貸本のほか

に、その商あきないをはじめたのはいいとして、手馴てなれぬ事の悲しさは、花客とくいのほかに、搔かっぱら払い抜取りげどうの外道があるのに心づかない。毎日のように攫さらわれる。一度の、どか利得もうけが大穴になつて、丸鬻だけでは店が危い。つい台所用に女房が立つたあとへは、鋌ての目が出て髻しを揉むと、「高利貸あいすが居るぜ。」とか云つて、貸本の素ひやか見しまでが遠とほざかる。当り触り、世渡よわたりは煩むずかしい。が近頃では、女房も見張りに馴れたし、亭主も段々古本市だの場末の同業を狙つて、掘出しに精々出あるく。

——好いい天氣の、この日も、午飯ひるすぎると、日向ひなたに古足袋ほこりの埃を立てて店を出たが、ひよこりと軒下へ、あと戻り。

「忘れものですか。」

「うふふ、丸鬚まげども、よう出来たたい。」

「いやらし。」

と顔をそらしながら、若い女房の、犠牲いけにえらしいあわれな媚こびで、わざと濡色の鬚たほを見せる。

「うふふ。」と烏打帽こうべの頭すくを竦めて、少し猫背で、水道橋の方へ出向いたあとで。……

四

遅い午餉ひるだったから、もう二時下り。亭主の出たあと、女房は膳ぜんの上で温茶ぬるちやを含んで、干ものの残りに皿をかぶせ、余った煮

豆に蓋ふたをして、あと片附は晩飯ばんと一所。で、拭布ふきんを掛けたなり台所へ突出すと、押入続きに腰窓が低い、上の棚に立掛けた小さな姿見で、顔を映して、襟を、もう一息搔合わせ、ちよつと縮れて癖はあるが、髪結かみゆいも世辞ばかりでない、似合つた丸髻まるまげで、さて店へ出た段取だつたが……

——遠くの橋を牛車うしぐるまでも通るように、かたんかたと、三崎座の昼芝居の、つけを打つのが合間に聞え、囃はやしの音がシヤラシヤラと路地裏の大溝おおどぶへ響く。……

裏長屋のかみさんが、三河島の菜漬めぞるを目筈めづらで買いに出るにはまだ早い。そういえば裁縫おはりの師匠の内の小女こおんなが、たつたいま一軒隣の芋屋いもやから前垂まえだれで盆を包んで、裏へ入つたきり、日和のおも

てに人通りがほとんどない。

真向うは空地だし、町中は原のなごりをそのまま、窪地のあちこちには、くさはえ草生がむらむらと、尾花は見えぬが、猫じやらしが、こぬかむし小糠虫を、穂でじやれて、逃水ならぬ日脚ひあしながれの流が暖く淀よどんでいる。

例の写真館と隣合う、向う斜ななめの小料理屋の小座敷の庭が、破れた生垣を透いて、うら枯れた朝顔の鉢が五つ六つ、中には転ったのもあって、葉がもう黒く、鶏頭ばかり根の土にまで日当りの色を染めた空を、スツスツと赤蜻蛉あかとんぼが飛んでいる。軒前のきさきに、不精たらしい釣つり葱しのぶがまだ掛かつて、露も玉も干乾ひからびて、蛙の干物のようなのが、化けて歌でも詠みはしないか、赤い短冊がついて

いて、しばしば雨風を喰くらつたと見え、摺切すりきれ加減に、小さくなつたのが、フトこつち向に、舌を出した形に見える。……ふざけて、とぼけて、その癖何だか小憎らしい。

立寄る客なく、通日も途絶えた所在なさに、何心なく、じつと見た若い女房が、遠く向うから、その舌で、頬を触るように思われたので、むずむずして、顔を振ると、短冊あじが軽く揺れる。頤あごで突きやると、向うへ動き、襟を引くと、ふわふわと襟へついて来る。……

「……まあ……」

二三度やって見ると、どうも、顔の動くとおりに動く。頬のあたりがうそ痒かゆい……女房くすくつたは撥くすくつたくなつたのである。

袖で頬をこすつて、

「いやね。」

ツイと横を向きながら、おかしく、流^{なが}盼^{しめ}が密^{そつ}と行^ゆくと、今度は、短冊の方から顎^{あご}でしゃくる。顎ではない、舌である。細く長いその舌である。

いかに、短冊としては、詩歌に俳句に、繡^{しゅう}口^{こう}錦^{きん}心^{しん}の節を持すべきが、かくて、品性を墮落し、威容を失墜したのである。

が、じれったそうな女房は、上気した顔を向け直して、あれ性^{しやう}の、少し乾いた唇でなぶるうち——どうせ亭主にうしろ向きに、今も鬩^{まげ}を賞^ほめられた時に出した舌だ——すぼめ口に吸つて、濡々と呂^{くち}した。

——こういう時は、南京豆ほどの魔が跳おどるものと見える。——

パツと消えるようであつた、日の光に濃く白かつた写真館の二階の硝子窓がらすまどを開けて、青黒い顔の長い男が、中折帽を被かぶつたまま、戸外おもてへ口をあけて、ペろりと唇を舐なめたのとほとんど同時であつたから、窓と、店とで思わず舌の合つた形になる。

女房は真うつむけに突伏つつぶした、と思うと、ついと立つて、茶の間へ遁にげた。着崩れがしたと見え、褌つまが捻よじれて足くびが白く出た。

五

「ごめんなさい。」

返事を、引込めた舌の尖で丸めて、黙りのまま、若い女房が、
 すぐ店へ出ると……文金の高島田、銀の平打、高彫の菊
 簪。十九ばかりの品のあるお嬢さんが、しつとり寂しいほど、
 着痩せのした、縞お召に、ゆうぜんの襲着して、藍地糸錦の丸
 帯。鶉の嘴がちよつと触つても微な堇色の痣になりそうな白
 玉椿の清らかに優しい片頬を、水紅色の絹半帕でおさええたが、
 且は桔梗紫に雁金を銀で刺繍した半襟で、妙齡の髪の艶
 に月の影の冴えを見せ、うつむき加減の頤の雪。雪のすぐあとへ
 は惜しいほど、黒塗の吾妻下駄で、軒かげに斜に立った。
 実は、コトコトとその駒下駄の音を立てて店前へ近づくのに、
 細り捌いた棲から、山茶花の模様のちらちらと咲くのが、早く茶

の間口から若い女房の目には映つたのであつた。

作者が——謂いたくないことだけれど、その……年暮くの稼れぎに、ここに働いている時も、昼すぎ三時頃——、ちようど、小雨の晴れた薄うすもや靄やに包まれて、向う邸やしきの紅あかい山茶花のぞが覗かれる、銀杏いちようの葉まつきいろの真黄色いろなのが、ひらひらと散つて来る、お嬢さんの肌についた、ゆうぜんさながらの風情なつかも可懐なつかしい、として、文金だの、平打だの、見惚みとれたように呆然ぼかんとして、現在の三崎町……あの辺町あたりの様子を、まるで忘れていたのでは、相済むまい。

——場所によると、震災後の、まだ焼やけのはら原はら同然で、この貸本屋の裏の溝が流れ込んだ筈はずの横川などは跡も見えない。古跡のつ

もりで、あらかじめ一度見て歩行あるいた。ひよろひよろものの作者
 ごときは、外套がいつうを着た蟻あのようで、電車と自動車が大昆虫のご
 とく跳梁奔馳ちようりようほんちする。瓦礫がれき、烟塵えんじん、混濁こんたくの巷ちまたに面した、その
 中へ、小春の陽炎かげろうとともに、貸本屋の店頭みせさきへ、こうした娘姿
 を映出すのは——何とか区、何とか町、何とか様ア——と、大入
 の劇場から女の声の拡声器で、木戸口へ呼出すように楽ゆには行か
 ない。なかなかもって、アテナ洋墨インキや、日用品の唐墨の、筆、ペ
 ンなどでは追っつきそうに思われぬ。彫るにも刻むにも、鋤すきと鋏くわ
 だ。

さあ、持って来い、鋤と鋏だ。

これだと、勢い汗膏あぶらの力作とかいう事にもなつて、外聞いが好い。

第一、時節がら一般の気うけが好^よかろう。

鋤と鍬だ、と瘦腕で、たちまち息ぜわしく、つい汗になる処から——山はもう雪だというのに、この第一回には、素裸の思案入道殿をさえ煩わした。

が、再び思うに、むやみと得物^{えもの}を振廻しては、馴^なれない事なり、耕^{こう}耘^{うん}の武器で、文金に怪我をさせそうで危かしい。

また^{ひる}翻^{がえ}つて、お嬢さんの出のあたりは——何をいうのだ——かながきの筆で行^ゆく。

「あの……此店^{こちら}に……」

若い女房が顔を見ると、いま小刻みに、長襦袢^{ながじゆばん}の色か、下着の袷か、はらはらと散りつつ急いで入った、息づかいが胸に動い

て、頬の半帕ハンケチが少し揺れて、

「辻町、糸七の——『たそがれ』——というのがおありになつて。」

と云つた。

「おいで遊ばせ。」

と若い女房、おくれ馳ばせの挨拶をゆつくりして、

「ございますの。……ですけれど、絡まとりました一冊本ではありませんせん……あの、雑誌の中に交つて出ていますのでして。」

「ええ、そうですよ。」

と水紅色の半帕がまたゆれる。

六

「ちよいちよい、お借り下さる方がございました、よく出ますか
ら。……唯ただいま今見ますけれど。」

女房は片膝立ちに腰を浮かしながら能書のうがきをいう。

「……私も読みたい読みたいと存じながら、商売もので、つい慾よ
張くばりまして、ほほほ、お貸し申します方が先へ立ちますけれど。」

……何ですか、お女郎の心中ものだとか申しますのね。」

「そうですつて。……『たそがれ』……というのが、その娼妓しょうぎ

——遊女おいらんの名だつて事です。」

と、凜りんとした眦まなじりの目もきつぱりと言つた。簪の白菊も冷いばか

り、清く澄んだ頬が白い。心中にも女郎にも驚いた容子ようすが見えぬ。もつともこのくらいな事を気にしては、清元も、長唄も、文句だつて読めなからうし、早い話が芝居の軒も潜くぐれまい。が、うつかり小説の筋を洩もらして、面と向つたから、女房が却つて瞼まぶたを染めた。

棚から一冊抜取ると、坐り直して、売りものに花だろう、前垂に据えて、その縮ちりめん緬しまの縞しまでない、厚紙の表紙を撫なでた。

「どうぞ、お掛けなさいまして、まあ、どうぞ。」

はなからその気であつたらしい、お嬢さんは框かまちへ掛けるのを猶た予めわなかつた。帯の錦は堆たかい、が、膝もすんなりと、着流しの肩が細い。

「ちようどいい処で、あの、ゆうべお客様から返ったばかりでございませぬ。それも書生さんや、職人衆からではございませぬ。」

娘客の白い指の、指環ゆびわを捜すように目で追つて、

「中坂下からいらつしやいます、紫鹿子かのこのふつきりした、結綿ゆいわた

のお娘ご、召した黄八丈なぞ、それがようお似合いなさいます。

それで、お袴はかまで、すぐお茶の水の学生さんなでございませうつて

。」

「その方。……」

女房の膝の方へは手も出さず、お嬢さんは、しとやかに、

「その作者が、鼯ひいき貞？」

と莞爾にっこりした。

辻町糸七、よく聞けよ。

「は？……」

貸本屋の客には今までほとんど例のない、ものの言葉に、一度聞返して、合点のみこんで、

「別にそうと限ったわけではございません。何でもよくお読みになりますの。でも、その、ゆうべおいでなさいました時、「たそがれ。——いいのね。」とおっしゃいます。……晩方でございましょう。変に暗くて気味が悪し、心細し、といえますうちにも、立込みまして、忙せわしくって不可いけませんと申しましたら、お笑いなさいましたんでございます。長屋世帯はすぐそれですから、ほほ

ほ。小説の題の事だったのでございますもの。大好きな女の名でいらつしやるんですつて。……田舎源氏、とかにもありますそうです。その時、京の五条とか三条あたりとかの暮方の、草の垣根に、雪白な花の、あわれに咲いたお話をききましたら、そのいな入相いりあいが、ほんのりと、夕顔ほどに明るく、白くなりましたでございましてね。」

女房は、ふと気がさしたか、町通りの向う角へ顔を向けた、短冊の舌は知らん顔で、鶏頭が笑っている。写真館の硝子窓しずかは静しずかに白い日を吸つて。……

「……古寺の事もうかがいました。清元にございますつてね。……とところどころ、あの、ほんとうに身に沁しみますようですから、

そのお娘ごにおねだりして、少しばかり、巻紙の端へ。——あ、そうそう、この本の中へ挟んで、——まあ、いい事をいたしました。大事に蔵^{しま}って置こうと存じながら、つい、うっかりして、まあ、勿体ないこと。」

と、軽く前髪へあてたのである。念のため『たそがれ』の作者に言おう。これは糸七を頂いたのでは決してない。……

七

「拝見な。」

「は、どうぞ。」

雑誌に被^{かぶ}せた表紙の上へ、巻紙を添えて出す、かな交りの優しい書^てで、

——折しも月は、むら雲に、影うす暗きをさいわいと、
 傍^{かたえ}に忍びてやりすごし、尚^{なお}も人なき野中の細道、薄茅^{すすきか}
 やはら
 原、押分け押分け、ここは何処^{いずこ}と白妙^{しろたえ}の、衣打つら
 ん砧^{きぬた}の聲、幽^{かすか}にきこえて、雁^{かりがね}音も、遠く雲井に鳴交わ
 し、風すこし打吹きたるに、月皎^{こうこう}々と照りながら、む
 ら雨さつと降りいづれば——

水茎の墨の色が、はらはらとお嬢さんの睫毛^{まつげ}を走つた。一露睨
 にうけたように、またたきして、

「すぐこのあとへ、しののめの鬼が出るんですのね、可恐^{こわ}いんで

すこと……。」

目白からは聞えまい。三崎座だろう、釣鐘がボーンと鳴る。

柳亭種彦のその文章を、そつと包むように巻戻しながら、指を添え、表紙を開くと、薄、茅原、花野を照らす月ながら、さつと、むら雨に濡色の、二人が水の滴りたそうな、光みつうじ氏と、黄たそがれ昏と、玉なす桔梗ききよう、黒髪おみなえしの女郎花みすの、簾みすで抱合みちゆきう、道行姿の極彩色。

「永洗えいせんですね、この口絵の綺麗なこと。」

「ええ、絵も評判でございます。……中坂の、そのお娘ごもおつしやいました。その小説の『たそがれ』は、現代いまのおいらんなんだそうですけれど、作者えかきだか、絵師えかきさんだかの工夫こころですか、意

つもり

匠あつらで、むかし風に誂あつらえたんでしよう、とおっしゃって、それに、

雑誌にはいろいろの作が出ておりますけれど、一番はなへのつて
 おりますから、そうやって一冊本の口絵のように……だそうなん
 でございますツて。」

「結ゆいわた綿わたの、御容ごようす子のいい。」

口絵から目を放さず、

「その方、いろいろな事を、ようござんじ……羨しいこと。表紙
 を別につけて、こうなされば、単行——一冊ものもおんなじよう
 で、作者だつて、どんなにか嬉しいでしょうよ。」

その方、という、この方、もいろいろな事を、ようご存じ。…
 …で、その結綿ゆいわたのかな文字を、女房の手に返すと、これがために

貸本屋へ立寄つたろう、借りて行く心づもりにも、口絵を伏せて、表紙をきちんと、じつと見た。

「あら。」

と瞳をうつくしく、

「ちよいと、辻町糸七作、『たそがれ』——お書きになつたのは、これは、どちらの、あのこちらの御主人。」

「飛んだ、とんだ、いいえ、飛んでもない。」

と何を狼狽うろたえたか、女房はまた顔を赤くした。同時に、要するに、黄色く、むくんだ、亭主の鼻に、額が打着ぶつかつたに相違ない。とにかく、中味が心中で、口絵の光氏とたそがれが目前めさきにある、ここへ亭主に出られては、しよげるより、悲かなしむより、周章あわて狼狽うろた

えずにいられまい。

「飛んでもない、あなた。」

と、息も忙せわしく、肩を揉もんで、

「宅などが、あなた、大それた。」

「そうだろう、題字は颯さつ爽そうとして、輝かしい。行と、かなと、

珊瑚さんご灑そぎ、碧へき樹じゆ梳しけつて、触るものも自おのから氣ずを附つけよう。厚

紙の白さにまだ汚点しみのない、筆の姿は、雪に珠じゆ琳りんの装よそであつた。

「あの、どうも、勿体なくて、つけつけ申しますのも、いかがで

すけれど、小石川台町にお住居すまいのございます、上杉様、とおつし

やいます。」

「ええ、映山先生。」

お嬢さんの珊瑚を鏤ちりばめた蒔絵まきえの櫛がうつむいた。

八

「どういたしまして。お嬢様、お心易さを頂くなぞとは、失礼で、おもいもありませんのでございますけれど。」

この紙表紙の筆について、お嬢さんが、貸本屋として、先生とちかづき知己のいわれを聞いたことはいうまでもなからう。

「実は、あの、上杉先生の、多勢のお弟子さん方の。……あなたは、小説がおすきでいらつしやいますのを、お見受け申しましたから……ご存じかも知れませんが、そのお一人の、糸七さん

でございませうが。」

「ええ。」

「実は——私ども、うまれが同じ国でございましてね、御懇意を願っておりますものですから。」

「ちつとも私……まあ、そうですね。」

「その御縁で、ついこの間、糸七さんと、もう一人おつれになつて、神保町辺へ用達ようたしにおいでなさいましたお帰りがけ、ご散歩かたがた、「どうだい、新店は立行たちゆくかい。」と最初のつけから掛構かけかまいなくおっしゃつて。——こちらは、それと聞きますと、お大名か、お殿様が御微行おしのびで、こんな破屋あばらやへ、と吃驚びっくりしましたのに、何にも入いらない。南画の巖いわのようなカステラーヤ、べんべらも

のの羊羹なんか切んなさるなよ。」とお笑いなすつて、ちようど宅が。」

また眉を顰めたが、

こぐめん

「小工面に貸本へ表紙をかぶせておりましたのをごらんさいますして、——「辻町のやつ、まだ単行が出来ないんだ。一冊纏まとつた

もののように、楽屋中うちで祝つてやろう。筆を下さい。」——この

すずりばこ

硯箱を。」

「ちよいと、一度これを。」

と、お嬢さんは、硯箱を押させて、仲よしの押絵の羽子板のよ
うに胸へ当てていた『たそがれ』を、きちんと据えた。

「……「ひどい墨だな、あやしい茶人だと、これを鳥の子に包む

んだ。」とおつしやりながら、すらすらおしたためになつたんでございませうが、あの、筆をおとり遊ばしながら、「婦おんなは遊おいらん女だ、というじゃないか。……（おん箸はしいれ入。）とかくようだ。中味は象牙ぞうげじゃあるまい。馬の骨だろう。」……何ですか、さも、おかしそうに。——そうしますと、糸七さんは、その傍そばで、小さくなつて。……」

お嬢さんの唇ほころの綻ほほえみびた微笑ほほえみに、つい笑つて、
「何の事ですか、私などには解りませぬの、お嬢様は。」

「存じませぬ。」

「あれ御承知らしくていらして……お意地の悪い、ほほほ。」
「いいえ、知りませぬ。中坂とかの、その結綿の方ならお解りで

しようね。……それよりか、『たそがれ』の作者の糸七——まあ、私、さつきから、……此店こちらとお知合とはちつとも知らないもんだから、……悪かったわねえ。糸七さん、ともいいませんでした。」

「いいえ、あなた、お客様は、誰方どなただって、作者の名を、さん附にはなさいません。格別、お好きな、中坂のその方だって、糸七と呼びすてでございますの。ええ、そうでございますとも。この辺でござらんさいまし。三崎座の女役者を、御鼻負ごひいきは、皆呼びすてでございます。」

言い得て女房、妙である。(おん箸入)の内容が馬の骨なら、言い得て特に妙である。が、当時梨園ぬきんでに擢ぬきんで出た、名優くめはち久女八は別として、三崎座なみは情なさけない。場面を築地辺にとればまだしも

であつたと思う。けれども、三崎町が事実なのである。

「ほほほ、お呼びずての方が却つてお心易くつて、——ああ、お茶を一つ。」

「おかみさん、ちよいと、あの、それより冷水おひやを。」

「冷水？」

「あの、ぎぶぎぶ、冷水で、この半ハンケチ帕を絞つて下さいませんか。

御無心ですが。私ね、実は、その町の曲角で、飛んだ気味の悪い事がありましたね。」

「その旅宿やじやの角まで、飯田町の方から来ますとね、妾わたしくるま、俵たわだつたんですけれど、幌ほろが掛かつていましたのに、何ですか、なまぬるい、ぬめりと粘つた、濡れたものが、こつちの、この耳の下から頬へ触つたんです。」

水紅色ときいろの半帕ハンケチが、今度は花弁はなびらのしぼむ状さまに白い指のさきで揺れた。

「あれ、と思つて、手を当てても何にもないんです。」

「あの、此店こちらへおいでなさいました、今しがた……」

女房は頬をすぼめ、眉を寄せて、

「……まあ。」

「慌てて俵をとめましてね、上も下も見ましたけれど、別に何に

もないんです。でも、可厭^{いや}らしく、変^{へん}に臭^{にお}うようで、気味が悪く
つて、気味が悪くつて。無理にも、何でもお願いしてと思つても、
旅宿^{やどや}でしよう、料理屋ですもの、両方とも。……お店の看板が
「かし本」と見えましたが時は、ほんとうに、地獄で……血の池で
……蓮^{はす}の花を見たようでしたわ。いきなり冷水^{おひや}を、とも言いかね
ましたけれど、そのうちに、永洗の、名もいいんですのね、『た
そがれ』の島田に、むら雨のかかる処だの、上杉先生の、結構な
お墨の色を見ましたら、実は、いくらかすつきりして来ましたん
です。」

珊瑚碧樹の水茎は、清^{すずし}く、その汚濁^{おじよく}を洗ったのである。

「いつまでも、さっきのままですと、私はほんとうに、おいらん

の心中ではないんですけど、死んでしまいたいほどでしたよ。」
 おおげさ
 大袈裟なのを笑いもしない女房は、その路連みちづれ、半町てまえ此方ぐら
 いには同感であつたらしい

「ええええお易い事。まあ、ごじようだんをおつしやつて、そん
 なお人がらな半帕を。……唯今、お手拭てぬぐい。」

茶の室まへ入るうしろから、

「綿屑わたくずで結構よ。」

手拭をさえ惜しんだのは、余程よっぽど身に沁しみた不気味さに違ちがいな
 い。

女房は行きがけに、安手やすてな京焼の赤湯呑を引攪ひっさらうと、ごぼご
 ぼと、仰向あおむくまで更あらためて嗽うがいをしたが、俵ひょうで来たのなどは見た事も

ない、大事なお花客とくいである。たしない買水を惜気なく使った。——
—そうして半帕を畳みながら、行儀よく膝のばに両の手を重ねて待ったお嬢さんに、顔へ当てるように、膝のばを伸しざまに差出した。

「ほんとうに、あなた、蠅子ぶよのたかりましたほどのあともござい
ませんから、御安心遊ばせ。絞りかえて差上げましょう。——さ
ようでございますか、フとしたお心持に、何か触ったのでござい
ましょう。御気分は……」

「はい、お庇かげで。」

「それにつけて、と申すのでもございませんけれど、そういえば、
つい四五日前にも、同じ処で、おかしなことがあったんでござい
ますの。ええ、本郷の大学へお通いなさいます学生さんで、時々

おいで下さいます。その方ですが、あなた、今日のような好いお日和ではありません、何ですか、しぐれて、曇つて、寂しい暮方でございましたの。

やあ、と云つて、その学生さんが、あの辻の方から。——油を惜しむなよ、店が暗いじゃないか。今つける処なのよ、とお心易立てに、そんな口を利きましてね、釣洋燈つりらんぶの傍そばに立っていますと、その時はお寄りなさらしないで、さつさと水道橋の方へ通越していらつしやいました。

三崎座が匆はねまして、両方へばらばら人通りがありました。それが途絶えましたちようどあとで、お一人で、さつさと幟のぼりのかけへ見えなくおなんなすつたんですが、燈ひがつかしました、まだ蕊しんの

加減もしません処へ、変だ、変だ、取殺される、幽霊だ、ばけものだ、と帽子なんか、仰向けに、あなた……」

十

「……燈をあかるくしてくれ、変だ。あ、痛い痛い、左の手を握って、何ですか——印を結んだとかいいますように、中指を一本押立てていらつしやるんです。……はじめは蜘蛛くもの巣かと思つたよ、とそうおいしいなさるものですから、狂やまいぬ犬でなくて、お仕合せ、蜘蛛ぐらい、幽霊も化ものも、まあ、大袈裟なことを、とおかしいようでしたが、燈でよく、私も一所に、その中

指を、じつと見ますと、女の髪の毛が巻きついていてるんでございましてね。」

「髪の毛ですえ、女の。」

お嬢さんは細い指を、白く揃えて、箱火鉢に寄せた。例のかれし 枯のぶ葱の怪しい短冊の舌は、この時もうろう朦朧として、滑稽おどけが理に落ちて、寂しくなつたし、鶏頭の赤さもやや陰翳かげつたが、日はまだ冷くも寒くもない。娘の客は女房と親しさを増したのである。

「ええ、そうなんぞございます。二人して、よく見ましたの、この火鉢の処で。」

お嬢さんは手を引込ひっこめた。枯野の霧の緋葉もみじほど、三崎街道の人の目をひいたろう。色ある半帕も、安んじて袖の振ふりへ納つた。が、

うつかりした。その頬を拭ぬぐった濡手拭は、火鉢の縁に掛かつてゐる。

女房はさまでは汚がらないで、そのまま、

「——学生さんの制服で駈かけ戻もどつて来なさいましたのは水道橋の方からでございましょう。お稻荷様の鳥居が一つ、跨またを上げて飛んで来たように見えたのですけれど、変な事は——その旅宿やどと向うの料理屋の中ほどの辻の処からだったんだそうでございましてね——灰色の雲の空から、すーっと、細いものが舞下つて来て、顔から肩の処へ掛かつたように思われたんでございまして。最初はな、蜘蛛の巣だろう……誰だつてそう思いますわ。

からだ身体をもがいて払うほどの事じゃなし——声を掛けて、内の前をお通りなさいました時は、もうお忘れなすつたほどだったそう

なんです、芝居の前あたりで、それが咽喉へ触りました、むずむずと、ぐうと扱しごくように。」

「いやですねえ。」

「いやでございますことね。——久女八が土蜘蛛をやっている、能がかりで評判なあの糸が、破風はふか、棟から抜出したんだらう。そんな事を、串じょうだん戯ごでなく思いなすつたそうです。

芝居ずき好きな方で、酔よつぱらつた遊びがえりの真夜中に、あなた、やっぱり芝居ずきの俵くろまや夫とと話わがはずむと、壱岐殿坂の真ま中なかあたりで、俵わかいしゆ夫とは吹消ふした提かんぼん灯とうを、鼠ねずみに踏ふまえて、真しん鍬ちゆうの煙き管せを鉄扇てつせんで、ギツクリやりますし、その方は蝦蟇がまぐち口くちを口くちに、忍術にんじゆつの一卷いっけんですつて、蹴けこみ込こみへ踞しゃがんで、頭あかまでかくした赤毛布あかげつとを段々

に、仁木彈正で糶上った処を、交番の巡查さんに怒鳴られたつて人なんでございますもの。

芝居のちつと先方へいらつしやると、咽喉を、そのしめ加減が違つて来て、呼吸にさわるほどですから、払つてもとれないのを、無理にむしり離して、からだを二つ三つ廻りながら、搔きはなすと、空へ消えたようだったそうでございますのに、また、キート、まるで音でもしますように戻つて来て、今度は、その中指へくるくと巻きついたんですが、巻きつくと一所に、きりきりきりきり引きしめて、きりきり、きりきり、その痛さといつては……

縫針のさきでさえ、身のうち響きますわ。ただ事でない。解くにも、引切るにも、目に見えるか、見えないほどだし、そこらは

暗し、何よりか知った家の洋燈とこらんぷの灯を——それでもって、ええ。

……

さあ、女の髪と分りました、漆のような、黒い、すなおな、柔かな、細々した、その長うございましたこと。……お嬢様。」

「いいえ、私のは。」

ついた様で、鬢びんへ触った。一うち、という眉が凜りんとして、顔の色が一層白澄しろずんだ。が、怪しい黒髪に見くらべたらしい女房の素振を憎んだのでなく、妙な話が身に沁しみたものらしい。

女房の言ことばを切つて、「いいえ」と云つたのは、またそんな意味ではなかつたのである。

「あれ、変な人が、変な人が……」

変な人が、女房の正面まおもてへ、写真館の前へ出たのであった。

十一

「ごむ僧でしょうか、あれ、役者が舞台の扮装なりのまままで写真を撮つて来たのでしょうか。」

と伸上るので、お嬢さんも連れられて目を遣やつた。

この場末の、冬日の中へ、きらびやかとも言ツつべく顕あらわれたから、怪しいまで人の目を驚かした。が、話の続きでも、学生を悩ました一筋の黒髪とはいささかも関係はない。勿論揃つて男で、変な人で、三人である。

並んだ、その真まんなか中なかのが一番脊せきが高い。だから偉大なる掌ての、親指と、小指を隠して、三本に箔はくを塗り、彩色したように見えるのが、横通りへは抜けないで、ずんずん空地の前を、このお伽堂へ押しして来た。

下駄と下駄の音も聞える。近づいたから、よく解る。三人とも揃はいの黒羽はぶたえ二重の羽織で、五つ紋の、その、紋の一つ一つ、円か、環の中へ、小鳥を一羽ずつ色絵に染めた詠あつらえで、着衣きものも同じ紋である。が、地じは上う下えとも黒くろつむぎ紬むぎで、質素と堅実を兼ねた好みに見えた。

しかし、袴はかまは、精巧ひら平ひらか、博多か、りゆうとして、皆見事で、就なかんずく中なかその脊せきの高い、顔の長い、色は青黒いようだけれども、

目鼻立の、上品向きにのっぺりと、且つしおらしいほど口の小形なの、あまつさえ、長い指で、ちよつとその口元をおさえられているのは、特にどんす緞子の袴を着した。

盛装した客である。まだお膳も並ばぬうち、譬たとえ喩にもしろはばか憚るべきだが、密そつと謂いおう。——縷しゆす子の袴の襷ひだとるよりも——とさえいふのである。いわんや……で、綾あやの見事さはなお目立つが、さながら紋緞子の野袴である。とはいえ、人ひと品にはよく似合つた。

この人が、塩瀬ふくさの服紗ふくさに包んだ一管の横笛を袴腰に帯びていた。貸本屋の女房がのつけに、薦こも僧そうと間違えたのはこれらしい。……ばかりではない。

一人、骨組の巖丈がっちりした、赤ら顔で、疎髯まだらひげのあるのは、張はりひじ
 肱ひじに竹の如意によいを提ひげ、一人、目の窪ひんだ、鼻の低い頤あごの尖とがつた
 のが、紐に通して、牙彫げぼりの白髑髏しやれこうべを胸から斜ななめに取とつて、腰こしに附つけた。

その上、まだある。申まを合わせて三人とも、青と白と緋ないま交まぜの糸
 の、あたかも片かた襷だすきのごときものを、紋附もんづの胸へ顕あ著はに帯たいした。
 いずれも若い、三十許わすか少すに前後ぜんご。氣きを負おい、色さ熾かんに、心こころを放はなつ、
 血氣けつぎのその燃もゆるや、男おとこくささは格別かくべつであらう。

お嬢ぢやうさんは、上あ氣きした。

処ところへ、竹如意ちくによいと、白髑髏しやれこうべである。

お嬢ぢやうさんはまた少し寒氣さむかがした。

横笛だけは、お嬢さんを三人で包んで立った時、焦茶の中折帽を真俯向けうつつむに、爪皮つまかわの掛かかった朴齒ほおばの日和下駄を、かたかたと鳴らしざまに、その紋緞子の袴の長い裾を白足袋で緩く匆はねて、真中の位置をずれて、ツイと軒下を横に離れたが。

弱い咳をすると、口元を蔽おほうた指が離れしなに、舌を赤く、唇をぺろりと舐なめた。

貸本屋の女房は、耳朶みみたぶまで真赤まっかになった。

写真館の二階窓で、葱しのがぶの短冊とともに翻ひるがえった舌はこれである。

が、接吻あやまと誤あやまったのは、心得違いであろう。腰の横笛を見るがいい。たしなみの楽の故に歌口をしめすのが、つい癖になつて出たのである。且つその不断の特異な好みは、齒を染めているので

分る。女は気味が悪かろうが、そんなことは一向構わん、艶々として、と見た目に、舌まで黒い。

十二

「何とかいったな、あの言種いぐさは。——宴会前で腹のすいた野原のつばでは、見るからに唾つばを飲まざるを得ない。薄皮で、肉充満いっばいという白いのが、妾めかけだろう、妾に違いない。あの、とろりと色気のある工合がよ。お伽堂、お伽堂か、お伽堂。」

竹如意が却つて一竹篋ひとしつべいぐら食くらいそうなことを言う。そのかわり、悟つた道人のようなあツはツはツはツ。

「その、言種がよ、「ちとお慰みに何ぞごらん遊ばせ。」は悩ませるじゃないか。借問しゃもんす貸本屋に、あんな口上、というのがあるかいは。」

「柄にあり、人により、類に応じて違うんだ。貸本屋だからと言って、股引ももひきの尻端折しりはしよりで、読本よみほんの包みを背負って、とことくと道を真直ぐまっすに歩行あるいて来て、曲尺形かねじやくがたに門戸もんかどを入つて、

「あ、本屋でござい。」とばかりは限るまい。あいつ妾か。あの妾が、われわれの並んで店へ立ったのに対して、「あ、本屋とござい。」と言って見ろ、「知ってるよ。」といって喧嘩けんかになりか、嘘うそにもしろ。」とその髑髏しやれこうべを指で弾はじく。

「いや、その喧嘩がしたかった。実は、取組とつくみあ合あいたいくらいな

ものだった。「ちと、お慰みにごらん遊ばせ。」……おまけに、ぼツと紅あかくなつた、怪しからん。」

「当る、当る、当るといふに。如意をそう振廻わしちや不可いかんよ。」

豆腐屋の親仁おやじが、売声をやめて、このきらびやかな一行に見惚みとれた体で、背後あとに廻まわつたり、横に出たり、ついて離れて歩行あるくのが、この時一度後うしろへ退しげつた。またこの親仁も妙である。青、黄に、朱さえ交つた、麦藁むぎわら細工の朝鮮帽子、唐人笠か、尾とがの尖つた高さ三尺ばかり、鯰なますの尾に似て非なるものを頂いて。その癖、素銅すあかの矢立やたて、古草鞋ふるわらじというのである。おしい事に、探偵ものだと、これが全篇を動かすほど働くであろう。が、今のチンドン屋の極

めて幼稚なものに過ぎない。……しばらくあつて、一つ「とうふ
 イ、生揚なまあげ、雁がんもどき」……売声をあげて、すぐに引込ひっこむ筈はずであ
 る。

従つて一行三人には、目に留めさせるまでもなければ、念頭に
 置かせる要もない。

「あれが仮すいに翠帳ちやうにおける言語ごんごにして見る。われわれが、も
 との人間の形を備えて、ここを歩行あるいていられるわけのものじゃ
 ないよ。斬るか、斬られるか、真剣抜打の応酬なくんばあるべか
 らざる処を、面壁九年、無言の行だ。——どうだい、御前ごぜん、この
 殿様。」

「お止よしよ、その御前、殿様は。」

と、横笛の紋緞子が、軽くその口をおさ圧えて、真中まんなかに居て二人を制した。

「あれだからな、仕方をしたり、目くばせしたり、ひたすら、自重謹厳を強要するものだから、止やむことを得ず、口をかん箝した。」

「無理はないよ、殿様は貸本屋をひやか素見したんじゃない。——見合の気だ。」

とまた鬮體を弾く。

「串じょうだん戯ぎじゃありません。ほほほ。」

「ああ、心臓の波打つ呼吸いきだぜ、何しろ、今や、シャツターを切らむとする三人の姿勢を崩して、窓口へ飛出したんだ。写真屋も驚いたが、われわれも唾然とした。何しろ、奢おごるべし、今夜の会

には非常なる寄附をしろ。俵くるまがそれなり駆抜けしないで、今まで、

あの店に居たのは奇縁だ。」

「しかし、我輩は与くみしない。」

「何を。」

「寂しい、のみならず澄まし切ってる、冷然としたものだ。」

「お上品さ、そこが殿様の目のつけ処よ。」

十三

「……何しろ、不思議な光景だった。かくして三人が、ほとんど無言だ。……」

「ほとんど処か全然無言で。……店頭みせさきをすすすと離れ際に、

「かえり帰途に寄るよ。」はいささか珍だ。白い妾に対してだけに、河

岸の張見世はりみせを素見すけんの台辞せりふだ。」

「人が聞きますよ、ほほほ、見つともない。」

と、横笛しわぶきが咳する。この時、豆腐屋の唐人笠が間近くその鼻を撞つかんとしたからである。

「ところで、立向つて赴く会場が河岸の富士見楼で、それ、よくこの頃新聞にかくではないか、紅裙こうくんさ。給仕の紅裙が飯田町だろう。炭屋、薪屋まきや、石炭揚場の間から蹴出しを蹴かして頭かぶわれたんでは、黒雲の中にひらめく風情さ。羅生門に髻ほうふつ髻ふつだよ。……その竹如意はどうだい。」

「如意がどうした。」

と竹如意を持直す。

「綱が切った鬼の片腕……待てよ、鬼にしては、可厭いやに蒼白あおしろい。

——そいつは何だ、講釈師がよく饒舌しゃべる、天保水滸伝てんぼうすいこでん中、笹川

方の鬼剣士、平手造酒猛虎ひらてみきたけとらが、小塚原こづかつばらで切取つて、袖口に隠し

て、千住こつの小格子ひやかを素見した、内から握つて引張ひっぱると、すぽんと

抜ける、女郎を気絶させた腕に見える。」

「腰の髑髏むくろが言わせませすかね。いうことが殺風景に過ぎますよ。」

「殿様、かつぎたまうかな。わはは。」

と揺ゆすり笑わらいをする、腰の髑髏むくろの齒はも笑う。

「冷く澄んでお上品な処に、ぞっこんというんだから、切った、

切つたが気になるんだ。」

「いや、縁はすぐつながるよ。会のかえりに酔払つて、今夜、立た

ちどころ

処ちどころに飛込むんだ。おでん、鍋焼、驕おごる、といつて、一升買わ

せて、あの白い妾。」

「肝腎かんじんの文金が、何、それまで居るものか。」

「僕はむしろ妾くみに与する。」

三崎座の幟のぼりがのどかに揺れて、茶屋の軒のつくり桜が野中に返咲きの霞を視みせた。おもては静かだが、場は大入らしい、三人は、いろいろの幟の影を、袴で波形に乗つて行く。

「また何か言われそうな気がしますがね、それはそれとしてだね、娘が借りるらしかった——あの小説を見ましたかね。」

「見た、なお且つ早くから知っている。——中味は読まんが、口絵は永洗だ、艶えんなものだよ。」

「そうだ、いや、それだ。」

竹如意が歩ある行きざまの膝を打って、

「あの文金だがね、何だか見たようでいて、さつきから思出せなかつたが、髑髏むくろが言うので思出した。春頃出たんだ、『閨けい秀しゅう小説』というのがある、知ってるかい。」

「見ないが、聞いたよ。」

「樋口一葉、若松賤子しずこ——小金井きみ子は、宝玉入の面紗ベールでね、洋装で素敵な写真よ、その写真が並んだ中に、たしか、あの顔、あの姿が半身で出ていたんだ。」

「私もそうらしいと思うですがね、ほほほ。」

「おかしいじゃないか、それにしちや、小説家が、小説を、小説の貸本屋で。」

「ほほほ、私たちだつて、画師えかきの永洗の絵を、絵で見るじやありませんか。」

「あそうか、清麗楚々そそとした、あの娘が、引抜くと鬼女になる。」
「戻橋きりだな、扇折あふりの早百合さゆりとくるか、凄すげいぞ、さては曲くせもの者だ。」
と、気競きおつて振返ると、髑髏むくろが西日に燃えた、柘榴ざくろの皮のようである。連れて見返つた、竹如意が茶色に光つて、横笛が半ば開いた口の歯が、また黒い。

三人の影が大きく向うの空地へ映つたが、位置を軽く転ずれば、

たちまち、文金に蔽おほいかかりそうである。烏がカアと鳴いた。

こうなると、皆化ける。安旅宿はたごの辻の角から、黒鴨仕立の車夫がちよろりと鯁あたまのような天窓を出すと、流るるごとく俵が寄つた。お嬢さんの白い手が玉のようつまにのびて、軒はずれに衝と招いたのである。と、緋羽ひばねの蹴込敷へ棲つまはずれ美しく、ゆうぜんの模様さざんかにない、雪なす山茶花がちらりと上へかくれた。

十四

しかり、文たかしまだ金のお嬢さんは、当時中洲辺に住居すまいした、月村京子、雅名をいっせつ一雪いっせつといって、実は小石川台町なる、上杉先生の

門下の才媛さいえんなのである。

ちよつとした緊張にも小さき神は宿る。ここに三人の凝視の中に、立つて俤を呼んだ手の、玉を伸べたのは、宿れる文筆の気のおのずから、美しい影を躡あわしたものであろう。

あたかも、髑髏と、竹如意と、横笛とが、あるいは燃え、あるいは光り、あるいは照らして、各々自家識見の象徴を示せるごとくに、

そういえば——影は尖とがつて一番長い、豆腐屋の唐人笠も、この時その本領を發揮した。

余り随ついて歩行あるいたのが疾やましかったか、道みちなか中へ荷を下ろして、首をそらし、口を張って、

——「とうふイ、生揚、雁もどき。」——

唐突だしぬけに、三人のすぐ傍そばで……馬鹿な奴である。

またこの三人を誰だ、と思う？……しかしこれは作者の言ことばよりも、世上おおいの大なる響ひびきに聞くのが可よからう。——次いで、四日と経たたないうちに、小川写真館の貸本屋と向むかいあ合あった店頭みせさきに、三人の影像けつえんが掲かげつゝえん焉んとして、金縁の額になつて顕あわれたのであるから。

——青雲社、三大画伯、御写真——

よつて釈然とした。紋の丸は、色も青麦である。小鳥は、雲雀ひばりである。

幅広と胸に掛けた青白の糸は、すなわち、青天と白雲を心に帯たいした、意気衝しょうてん天の表現なのである。当時、美術、絵画の天地

に、氣昂あがり、意熱して、麦のごとく燃え、雲雀のごとく翔かけつた、青雲社の同人は他にまた幾人か、すべておなじ装よそおいをしたのであつた。

ただしこれは如実の描写に過ぎない。ここに三画伯いでたちの扮装を記したのを視みて、術奇げんき、表異、いささかたりとも軽けい 佻ちよう、諷刺ふうしの意を寓くうしたりとせらるる読者は、あの、紫の顛はちまき 卷まきで、一つ印籠いんろう何とかの助六の氣障きざさ加減は論外として、芝居の入山形段だんだら々々のお揃そろいをも批判すべき無法な権利を、保有せらるべきものであらねばならない。

ついでにいう。ちようどこの時代じぶん——この篇、連載の新聞の挿さ

繪受持しえで一座きよの清方きよかたさんは、下町育ちの意気なお母さんの袖うちの裡うちに、博多の帯の端然きちんとした、襟の綺麗な、眉の明るい、秘蔵子の健ちゃんであつたと思う。

さて続いて、健ちゃんに、上野あたりの雪景色をお頼み申そう。

清きよ水みずの石磴いしだんは、三階五階、白瀬の走る、声のない滝となつ

て、落ちたぎり流るる道に、巖角いわかどほどの人影もなし。

不しの忍ぼずへ渡す橋は、玉の欄干を築いて、全山の樹立こだちは真白まっしろである。

これは——翌年きよの二ふた月つき、末の七日の朝の大雪であつた。——
昨夜ゆうべ、宵のしとしと雨が、初夜過ぎに一度どつと大降りになつ

て、それが留やむと、陽気もぽつと、近頃での春らしかったが、夜よ
 半なかに寂然しんと何の音もなくなると、うつすりと月が朧おぼろに映すように、
 大路、小路、露地や、背戸や、竹垣、生垣、妻戸、折戸に、密そつと、
 人目を忍んで寄添う風情に、都みやこ振ごりなる雪女郎の姿が、寒くば
 絹綿を、と柳ささやに囁ささき、冷い梅の苔つばみはもとより、行倒れた片輪車、
 掃溜はきだめの破やれむしろ筵むしろまでも、肌すく白い袖で抱いたのである。が、
 由来宿業しゆくごうとして情あだと仇あだと手のうらかえす雪女郎は、東雲しののめの
 頃ころの極寒に、その気色たちまち変つて、拳こぶしを上げて、戸あおを煽あおり、
 廂ひさしたたを鼓たたき、棲すまを飛ばして棟けを蹴けた。白面皓こうしん身の夜叉やしやとなつて、
 大空を駆けめぐり、地を埋め、水を消そうとする。……

今さかんに降っている。

十五

……盛に降っている。

たてに、斜ななめに、上に、下に、散り、飛び、煽あおち、舞い、漂い、

乱るる、雪の中に不忍の池なる天女の楼台は、絳こうへき碧の幻うつつぼりを、梁
の虹ちりばに鏤め、桜柳の面影は、鬢あいたい鬢たる瓔ようらく珞を白妙しろたえの中ふ空に吹
靡きなびく。

厳いつくしき門いしずえの礎は、霊ある大魚の、左さう右さうに浪を立てて白く、御堂みどう

を護るのを、詣もうずるものの、浮足ゆきくぐに行潜ると、玉敷く床の奥深く、

千条ちすじの雪の簾すだれのあなたに、丹塗にぬりの唐戸は、諸もろとびら扉ひら両方に細めに

展ひらけ、錦にしきの帳とばり、翠すいらん藍らんの裡うちに、銀ぎんの皿しやくの燈明とうめいは、天地てんちの一白はくに凝こつて、紫むらさきの油あぶら、朱しゆ燈心とうしん、火尖ほさきは金こん色しきの光ひかりを放はなつて、三さんつ二につひらひらと動うごく時とき、大池おほいけの波なみは、さながら白蓮びやくれんげ華はなを競あそんで咲さいた。
 ——白雪しやくせきの階かゝりの下もとに、ただ一人ひとり、棲すまを折しり緊きめ、跪ひざまずいて、天女てんじよを伏ふ拝をむ女めがある。

すぐ傍わきに、空あしき蘆よしず簀ばり張はりの掛茶屋かぢやが、埋うもれた谷やの下伏したせの孤ひ屋やに似にて、御手洗みたらしがそれそれに続つき、並ならんで二に体の地蔵尊ぢざうそんの、来らい迎むかひの石いしにおわするが、はて、この娘こはの、と雪ゆきに顔かほを見合みあわせたまたまう。

見れば島田しまた鬚まげの娘むすめの、紫地むらさきぢの雨合羽あまがっぱに、黒天鵝くろてんが絨じよの襟えりを深しほく、
 拜うづむんで俯向うつむいた頸えりの皓しろさ。

吹乱す風である。洩蛇目傘しづじやのめを開いたままで、袖摺そでずれに引着けた、またその袖にも、霏々ひひと降りかかつて、見る見る鬢びんのおくれ毛に、白い羽子はねが、ちらりと来て、とまって消えては、ちらりと来て、消えては、飛ぶ。

前髪にも、眉毛にも。

その眉の上なる、朱の両方の円柱まるばしらに、

……
妙みょう吉きつ祥しょう……

……
如蓮華にょれんげ……

一聯れんの文字が、雪の降りつもる中うちに、瑠璃るりと、真珠を刻んで、清らかに輝いた。

再び見よ、烈しくなった池の波は、ざわざわとまた亀甲きっこうを聳そばた

てる。

といううちに、ふと風が静まると、広小路あたりの物音が渡つて来て、颯さつと浮世に返ると、枯蓮の残ンの葉、折れた茎の、且つ浮き且つ沈むのが、幾千羽の白鷺しらさぎのあるいはたたずイみ、あるいは眠り、あるいは羽搏はうつ風情があつた。

青い頭、墨染の僧わかの少い姿が、御堂内みどうに、白足袋でふわりと浮くと、蠟燭ろうそくが灯を点じた。二つ三つまた五つ、灯ほききは白く立って、却かへつて檐のきさき前を舞う雪の二片三片が、薄うすくれない紅ひるがえの蝶ひるがえに翻ひるがえつて、ほんのりと、娘の脛まぶたを暖めるように見える。

「お蠟をあげましてござります。」

「は。」

僧は中腰に会釈して、

「早朝より、ようお詣り……」

「はい。」

「寒じが強うござります、ちとおあがりになつて、御休息遊ばせ
。」

この僧が碧牡丹へきぼたんの扉の蔭へかくれた時、朝詣あさもうでの娘は、我がために燈明の新しい光を見守つた。

われら、作者なかまの申合わせで、ここは……を入れる処であるが、これが、紅べにで印刷が出来ると面白い。もの言わず念願する、娘の唇かすかの微かすかに動くように見えるから。黒ほちぼち、では、睫毛まつげの顫ふるえる形にも見えない。見えても、と短いようで悪いから、紙費ついでだ

けれど、「白にする。」

十六

時に、伏拝むのに合せた袖口の、雪に未開紅の風情だったのを、ひらりと一咲き咲かせて立つて、ちよつとおくれ毛を直した顔を見ると、これは月村一雪、——中洲のお京であつた。

実は——

「……小説が上手に書けますように……」

どうも可訝おかしい、絵が上手になりますように、踊ほかが、浄瑠璃じょうろうりが、裁縫おしごとが、だとよく解きこえるけれども、小説は、他ほかに何とか祈念

のしようがありそうに思われる。作者だつてそう思う。人生の機微に針の尖さきで触れますように、真理を鋭刀メスで裂きますように、もう一息、世界の文豪を圧倒しますように……でない、承知の出来ない方々が多いと思う。が、一雪のお京さんは確たしかに前条のごとくに祈念したのである。精確な処は、傍かたえに真白まつしろに立たせたまえる地蔵尊に、今からでも聞かせるが可いい。

なお、かし本屋の店頭でもそうだし、ここでの紫の雨合羽に、塗ぬりの足駄など、どうも尋常ただな娘で、小説家らしい処がない。断髪で、靴で、頬ほお邊が赤くないと、どうも……らしくない。が、硯けんゆ友社うしやより、もつと前、上杉先生などよりなお先に、一輪、大きく咲いたという花形あけぼのの曙女史と聞えたは、浅草の牛肉屋の娘で――

—御新客、鍋で御酒——帳場ばかりか、立込むと出番をする。緋鹿子の襷掛けで、二の腕まで露呈に白い、いささかも黒人らしくなかつたと聞いている。

また……ああ惜しいかな、前記の閨秀小説が出て世評一代を風靡した、その年の末。秋あわれに、残シの葉の、胸の病の紅い小枝に縫つたのが、凧に儂く散つた、一葉女史は、いつも小机に衣紋正しく筆を取り、端然として文章を綴つたように、誰も知りまた想うのである。が、どういたして……

——やがてこのあとへ顔を出す——辻町糸七が、その想う盾の裏を見せられて面食つた。糸七は、一雑誌の編輯にゆかりがあつて、その用得、本郷丸山町、その路次が、（あしき隣もよしや

世の中)と昂然^{こうぜん}として女史が住んだ、あしき隣の岡場所で。：

——おい、木村さん、信さん寄つておいでよ、お寄りといつたら寄つても宜^いいではないか、また素通りで二葉屋へ行く気だろう——

にはじまつて、——ある雨の日のつれづれに表^{おもて}を通る山高帽子の三十男、あれなりと取らずんば——と二十三の女にして、読書界に舌を巻かせた、あの、すなわちその、怪しからん……しかも梅雨時、陰惨としていた。低い格子戸を音訪^{おとず}れると、見通しの狭い廊下で、本郷の高台の崖下だから薄暗い。部屋が両方にある、茶の間かと思う左の一層暗い中から、ひたひたと素足で、
銀杏^{いちようがえ}

返しのほつれながら、きりりとした蒼あお白しろい顔を見せた、が、少ま前え屈かみになつた両手で、黒くろ縷じゆす子すと何か腹合せの帯の端を、
 ぐい、と取つて、腰を斜めに、しめかけのままかまち框へ出た。さて、
 しゃんとしま緊しまつたところが、（引ひ掛かけ、）また、（じれつた結むすび）、
 腰したの下した緊しまへずれ下つた、一名（まおとこ結むすび）というやつ、む
 すび方の称とえを聞きいただけでも、いまでは町内で棄すて置おくまい。
 差配さばいが立たちどころころに店ただたてを啖くわせよう。

——「失礼な、うまいなり、いいえね、余りくさくさするもん
 ですから、湯呑で一杯……てつたところ……黙もつてて頂戴。」——

端正どころか、これだと、しごきで、頽たい然ぜんとしていた事にな

る。もつとも、おいらんの心中などを書く若造を対^{あいて}手ゆえの、心易^{あねご}さの姐^{ふるまい}娘の挙動であつたらうも知れぬ。

——「今日は珍らしいんです、いつも素^{ぞめき}見大勢。山の方から下

りていらつしやる方、皆さん学者、詩人連でおいで遊ばすでしよ

う。英語はもとより、仏蘭西をどうの、独^{ドイツ}乙をここの、伊^{イタリー}太利語、

……希臘^{ギリシヤ}拉^{ラテン}甸……」——

と云つて、にっこり笑つたそうである。

が、山から下りて来るといふ、この人々に対しては、（じれつ

た結び）なぞ見せはしない、所帯ぎれのした昼夜帯も（お互に貧

乏で、相向つた糸七も足袋の裏が破れていた。）きちんと胸高な

お太鼓に、一銭が紫^{むらさきこ}粉で染返しの半襟も、りゆうと紗^さ綾^や形^が見

せたであろう、通力自在、嬢娘の腕は立派である。

——それにつけても、お京さんは娘であつた。雪の朝の不忍の
天女詣もうでは、可憐いとしく、可愛いい。

十七

お京は下向げこうの、碧玳瑁へきたいまい、紅珊瑚こうさんご、粧門しょうもんの下もとで、ものを
期たましたるごとくしばらく人待顔たらずにイんだのは誰たがためだろう。――
――やがて頭巾ずきんを被かぶつた。またこれだけでも一仕事で、口で啣くわえても
藤色縮緬ちりめんを吹返すから、頤おとがいへ手繰つて引結うのに、撓しなつた片手
は二の腕まで真白まっしろに露呈あらわで、あこがるる章魚たこ、太刀魚たちのうお、烏賊いか

の類たぐいが吹雪の浪を泳ぎ寄りそうので、危つかしい趣さえ見えた。

—— ついでに言おう。形容にもせよ、章魚、太刀魚はいかがだけれど、烏賊は事実居た……透かして見て広小路まで目は届かずとも、料理店、待合など、池の端はたあたりにはふらふらと泳いでいたろう——

その頃は外がい套とうの襟へ三角なり形の羅紗らしや帽子を、こんな時に、いや、こんな時に限らない。すつぽりと被るのが、寒さを凌ぐより、半分は見得で、帽子の有あり無なしでは約二割方、仕立上りの値が違う。ところで小座敷、勿論、晴れの席ではない、卓ちゃぶ子ぶ台だいの前へ、右のその三角帽子、外なり套なりの態なりで着座して、左ひだり 褌づまを折おり捌さばいたの、部屋はだ着だを開けたのだのが、さしむかいで、盃洗はらいが出るとなつては、

そのままいきなり、泳いで宜よろしい、それで寄鍋をつつくうちは、
 まだしも無鱗類の餌らしくて尋常だけれども、沸爛にえがんを、めらめ
 らと燃やして玉子酒となる輩ともがらは、もう、妖怪に近かった。立てば
 槍鳥賊やり、坐れば真鳥賊ま、動く処は、あおり鳥賊、と拍子にかかる
 と、また似たものが外ほかにあつた。

季節はそれるが、その形は、油蟬にも似たのである。

——月府玄蟬げつぷげんせん——上杉先生が、糸七同門の一人に戯たわむれに名づけ
 たので、いう心は月賦で拵こしらえた黒色外套の擲揄やゆである。これが出
 来上つた時、しかも玉虫色の皆絹裏かいきうらがサヤサヤと四辺あたりを払つて、
 と、出立いでたつた処は出来でかしたが、懐中空むなしゆうして行ゆく処ところがない。
 まさか、蕎麦屋そばやで、かけ一、御酒なしでも済まないの、苦心の

結果、場末の浪花節を聞いたという。こんなのは月賦が必ず滞^{たま}る。……洋服屋の宰^{さい}取^{とり}の、あのセルの前掛^{まえかけ}で、頭の禿^はげたのが、ぬかろうものか、春暖相催し申候や否や、結構なお外套、ほこり落しは今のうち、と引剥^{ひきは}いで持つて行くと、今度は蟬の方で、ジイジイ鳴^{なき}噪^{さわ}いでも繭^も棹^{ぢやう}の先へも掛けないで、けろりと返さぬのがおきまりであつた。

——弁^{べん}持^{もち}十二——というのも居た。おなじ門^{もん}葉^{よう}の一人で、手弁で新聞社へ日勤する。月給十二円の洒落^{しやれ}、非ず真剣を、上杉先生が笑つたのである。

ここに——もう今頃は、仔細^{しさい}あつて、変な形でそこいらをのそついているだろう——辻町糸七の名は、そんな意味ではない。

上杉先生の台町とは、山……一つ二つあなたなる大塚辻町に自炊して、長屋が五十七番地、渠かれ自ら思いついた、辻町はまずいい、はじめは五十七、いそなの磯菜。

「ヘン笑かすぜ、」「にやけていやがる、」友達が熱笑冷罵する。そこで糸七としたのである。七夕の恋の意味もない。三味線さみせんの音色もない。

その糸七が、この大雪に、乗らない車坂あたりを段々に、どんな顔をしていよう。名を聞いただけでも空腹すきばらへキヤリと応える、雁鍋がんなべの前あたりへ……もう来たろう。

お京の爪つまかわ皮が雪を噛かんで出た。まっすぐに清水きよみず下の道へは出ないで、横に池について、棲さばはするすると捌たどくが、足許の辿たど

々どしき。

十八

寒い、めつきり寒い。……

氷月と云う汁粉屋の裏垣根に近づいた時、……秋は七草で待遇もてなしたろう、枯尾花に白い風が立つて、雪が一捲ひとまき頭巾を吹きなぐると、紋の名入の緋葉もみじがちらちらと空に舞った。お京の姿は、傘もたわわに降り積り、浅黄で描いた手弱女たおやめの朧おぼろよ夜深よき風情である。

「あら、月村さん。」

紅入ゆうぜんの裳すそも蹴開くばかり、包ましい腰の色気も投棄てに……風はその背後うしろから煽あおつて……吹靡ふきなびく袖で抱込むように、前途ゆくてから飛着いた状さまなる女によし性があつた。

濃こみどり緑の襟巻に頬を深く、書生羽織で、花月巻の房々したのに、頭巾は着ない。雪の傘からかさの烈はげしく両手に揺るとともに、唇で息を切つて、

「済みません、済みませんでした、お約束の時間におくれツちまいました。」

「まあ、よくねえ。」

と、此方こなたも息を吻ほっとしながら、

「これではどうせ——三浜みはまさん、来いらつしやらないと思つたもん

ですから、参詣おまいりを先に済ませて、失礼でしたわ。」

「いいえ、いいえ。」

「何しろこの雪でしょう、それに私などと違って、あなたはお勤めがおありになりますから。」

「ところが、ですの。」

とまた一息して、

「私の方こそ、あなたと違って、歩行くあるのも、動くのも、雨風だつて、毎日体操同然なんでしょう、

と云つた。「教え子」と題した、境遇自叙の一篇が、もう世に

出ていた。これも上杉先生の門下で。——思案入道殿やかたの館やかたに近い
処、富坂とみざか辺かに家居いえいした、礫れきせん川せ小学校の訓導で、三浜渚なぎさ女史で

ある。年紀はお京より三つ四つ姉さんだし、勤務が勤務だし、世馴れて身の動作も柔かく、内輪の裡にもおのずから世の中つい通り——ここは大衆としようか——大衆向の艶を含んで、胸も腰もふつくらしている。

「わけなし、疾くに支度をして、この日曜だというのに袴まで穿きましたんです、風がありますからですが。この雪と来て、あなたは不断お弱いし……きつとお出掛けなさりはしないだろう、と一人で極めて、その袴も除けてさ、まあ。ご丁寧に、それで火鉢に噛りついたんですけれど……そうでもない、ほかの事とは違って、お参詣をするのに、他所の方が、こうだから、それだから、どうの、といつては勿体なし……一人でも、と思えますと、さあ、

あなたも同じ心でお出掛けになつたかも分らない。——急に火鉢の火のつくように、飛上つて、時間がおくれた、大変だ。お待ち合せを約束の仲町ちやうを出た、あの大時計が雪の塔、大吹雪の峠の下に、一人旅で消えそうに彳たつていらつしやるのが目さきに隠現ちやうつくもんですから、一息に駆出すようにして来たんです。気ばかり急いで。」

と、顔をひたと合わせそうに、傘からかさを横に傾けたので、耳にまで飛ぶ雪を、鬢びんを振つて、払い、はらい、

「この煙とも霧とも靄もやとも分らない 卍まんじ 巴ともえの中に、ただ一人、薄うつつりとあなたのお姿を見ました時は、いきなり胸で引包ひつつんで、抱いてあげたいと思ひましたよ。」

「抱かれない、おほほ。」

と口紅が小さく白く、雪に染まった。

「え？」

ただの世辞ではなかったが、おもいがけないお京の返事が胸を衝いたから、ちよつと呆れて、ちよつと退しきって、

「まあ、月村さん」

「おほほ、三浜さん」

「お元気、お元気……」

渚も元気を増したらしい。

「ですが、顔の色がお悪いわ、少し蒼ざめて。……何しろ、ここへ入って休みましょう——ええ、私のお詣りはそれから、お精進だから構いません、お汁粉ですもの。家がまた氷月ですね。気のきかない、こんな時は、ストーブ軒か、炬燵亭こたつていとでもすれば可よござんすのに。」

その木戸口に、柳が一本ひとつもと、二人を蔽おおう被衣かつぎのように。

「閉っていたって。」

と、少し脊伸びの及および腰こしに、

「この枝折戸しおりどの掛金は外ずしてあります。表へだと、大廻りですものね。さあ、いらつしやい。まこと開かなけりや四目垣ぐ

らい、破るか、乗越のつこすかしちまいますわ。抱かれてやろうといて下すつた、あなたのためなら。……飛んだ門破りの板額はんがくですね。」

渚が傘を取直して、

「武器えものは、薙刀なぎなた。」

「私は、懐劍。」

二人が、莞爾にっこり。

お京の方が先んじて、ギイと押すと、木戸が向うへ、一步先陣、蹴出す緋鹿子、揺ゆるぎの糸が、弱腰をしめて雪を開いた。

「おお、まあ、天晴あっぱれ。」

「と、おっしやつて下すつた処で、敵手あいてはお汁粉よ。」

「あなたは。」

「え、私は、塩餡しおあん。」

「ご尋常……てまえは、いなか。」

「あとで、鴨雑煮かもぞうじ。」

「驕おごる平家ね、揚羽の蝶のように、まだ釣つり葱しのぶがかかっていますわ。」

と閉った縁ひさしの廂を見つつ、急に渚が肩をよじた。

「ああ、冷い、柳の枝うしろが背から。」

肩を払うと、顔へかかるのを、片手でまた搔かき遣って、頬をすぼめた。

「雫しずくもしないのに濡れたんですか、冷いこと。」

お京も立停たちどまつて振向いた。

「髪の毛ですわ……あら、私ンじゃない。」

しごいて、引いて、幾重にも巻取るようにした指を、離すと、すつと解けて頬を離れる。成程、渚のではない。その渚が——女だ、髪にはどこまでも目が繊細こまかい——雪を透かして、

「まあ、長い、黒い、美しい……どこまでも雪の上を。——月村さん、あなたのですよ。」

「いいえ、私。」

「良い薰いもするようです。どこかに梅かしら。それ、そうですねとも。……頭巾をこぼれて、黒く一筋。」

「すこしは長いといえますけれど、薄いほどだつて言われますも

の。」

と頭巾を解き、颯さつと躪あらわれた島田の銀の丈たけなが長が指ゆび尖さきとともに揺れると、思わず傘を落した。

「気味の悪い。」

降りしきったのが小留おやみをした、春の雪だから、それほどの気色でも、霽はれると迅はやい。西空の根津一帯、藍あい染そめ川の上あたり、一筋の藍を引いた。池の水はまだ暗い。

「気味の悪い？……気味の悪い事があるもんですか。手で引いてごらんなさいよ、ね、それ、触るでしょう、耳の下、ちつと横、手繰って。……そう、そう、すらすらと動きますわ、木戸の外の柳の上まで、まあ。」

「私どうしましょう。」

「結構じゃありませんか、あなたの指から、ああ鬢びんの中へ。」

と、相傘するまで、つと寄添う。

「私どうしましょう。」

と、乳のあたりへ袖を緊しめつつ、

「空から降って来やしないんでしょうか。」

「……空からでしょうよ、池からでしょうよ、天女からお授かりなすったのかも知れませんか、羨しいったらありますせんわねえ。」

「でも、私、小説が上手に出来ますように——笑わないで頂戴：
…そういつて拝んだんですのに。」

「じようだんじやありません、かりにもそのくらいなものをお授
かりになつたんですのに。」

「半分切つてあげましょうか。」

「驚いた…：誰方どなたにさ。」

「三浜さんに。」

「まあ。」

「だつて、二人でお詣りに来たんですもの。」

「まあ、慾よくのおあんなさらない、可愛い、それだから私に抱かれ
ようつて…：ほんとに抱きますよ。」

「あれ、人が居ます、ほほほ。」

「ええ、そう。——もうあそこまで行きました。」

——ひと齊しく見遣った。

富士嵐おろしというのであろう。西の空はわずかに晴間を見せた。が、池の端を内へ、柵に添って、まだ濛々もうもうと、雪ゆき烟けぶりする中を、スイと一人、スイと、もう一人。やや高いのと低いのと、海月くらげが泳ぐような二人づれが、足はただよのように、向ううつむけに沈んで行く。……

脊の高い方は、それでも外套がいとう一着で、すっぽりと中折帽なかひさげを被かぶっている。が、寸の短い方は、黒の羽織みに袴はかまなし、蓑みのもなしで、見つともない、その上紋もんつき着き。やがて渚しづに聞けば、しかも五つ紋

で。——これは外套の頭巾ばかりを木菟みみずくに被つて、藻抜けたか、
すべりお 辻落こんぱくちたか、その魂魄こんぱくのようなものを、片手にふらふらと提
 げている。渚に聞けば、竹の皮包だ——そうであつた。

「——あれ、辻町さんよ、ちよいと。」

「辻……町」

「糸七さんですつてば。——つい、取紛れて、いきなり噂をしよ
 うつて処、おくれちまいましたんですがね、いま、さつき、現に
 いま……」

「今……」

「懐劍、といつて、花々しく、あなたがその木戸をお開けなすつ
 た時ですよ。たちどま立停つてしばらく見ていましたんですよ、二人とも。」

頭巾を被つておいでだし、横吹きに吹掛けていましたから、お気がつかなくつたんです。もつともね、すぐその前、あすこで——私はお約束の大時計より、大変な後れ方おくですから、俵くるまをおりると、早廻りに、すぐ池の端へ出て、揚出しわきの、あの、どんどの橋を渡つて、正面に傘つきさを突翳して来たんでしよう。ぶつかりそうに、後うしろすが継りに、あの二人に。

おや……帽子はすっぽりでも、顔は分りましたから、ちよつと挨拶はしましたけれど、御堂みどうの方へ心はせきます。それにお連れがまるで知らない人ですから、それなり黙つてさ。それだつて、様子を見ただけでも、お久しぶりとも、第一、お早う、とも言えた義理じゃありませんわ。」

「どうしたんでしよう、こんな朝……雪見とでもいうのかしら。」
「あなたもあんまりお嬢さんね。——吉原の事を随筆になすつた
じやありませんか。」

「いやです、きまりの悪いこと。……親類に連れられて、浅草か
ら燈籠とうろうを見に行つただけなんです、玉菊の、あの燈籠のいわれ
は可哀あわれですわね。」

「その燈籠は美しく可哀だし、あの落武者……極きまつていますよ、
吉原がえりの落武者は、みじめにあわれなこと。あの情なさけない様子
つたら。おや、立停りましたよ、また——それ、こつちを見てい
ます。挨拶——およしなさい、連つれがありますから。どんなことを
言出そうも知れません。糸七さん一人だつて、あなたは仲が悪い

んでしよう。おなじ雑誌に、その随筆の、あの人、悪口を記いた
じやありませんか。」

「よくご存じですこと。」

簪かんざしを挿込むと、きりりと一文字にひそめた眉を、隠すように、
傘を取って、熟じつと、糸七とその連を視みた。

二十一

「しかし、しかしだね、（雪見と志した処が、まだしも）……何
とかいったつけ、そうだ（……まだしも、ふ憫びんだ。）」

「あわれ、憫然というやつかい。」

「やっぱり、まだしも、ふ憫だ。——（いや、ますます降るわえ、奇絶々々。）と寒さにふるえながら牛骨が虚飾みえをいうと（妙。）——と齒を喰くい切しって、骨董こつとうが負惜しみに受ける処だ。

またあたかも三馬の向島の雪景色とおなじように、巻込まれた処へ、（骨董子、向うから来るのは確たしかに婦人だぜ。）と牛骨がいうと、（さん候この雪中を独歩するもの、俳気のある婦人か、さては越こしの国にありちゆう雪女なるべし、）傭やといお針か、産婆だろう、とある処へ。……聞いたら怒るだろう、……バツタリ女教師の渚女史にぶつかったなぞは——（奇絶、奇絶。）妙……とお言いよ。」

「言えないよ。女作家の事はまた、べつとして……馬鹿々々しい

よ。」

「三馬（式亭）が馬鹿々々しい、といつて……女郎買に振られて
帰つたこの朝だ。俵くるまちゃん賃なしの大雪に逢つて、翻訳ものの、ト

ルストイヤ、ツルゲネーフと附合つたり、ゲータ、シルレルを談
じたつて、何の役に立つものか。そこへ行くゆと三馬だ。お馴染なじみが
いにいくらか、景気をつけてくれる。——「人間にんげん万事ばんじう嘘そぼ誕つかり計」

——骨董と牛骨が向島へ雪見の洒落で、ふられた雪を吹飛ばそう
。」

「外聞の悪いことをいうなよ、雪は知らないが、ふられたのは俺
じゃないぜ。」

と、大島の小袖に鉄無地の羽織で、角打の紐を縦にひとしご一ひとしご扱ひとしごき扱ひとしご

いたのは、大学法科出の新学士。肩書の分限ぶげんに依つて職を求むれば、速すみやかに玄関を構えて、新夫人にかしずかるべき処を、僻へきして作家を志し、名は早く聞えはするが、名実あい合かなわず、碎いて言えば収入みいりが少いから、かくの始末。藍染川と、忍川の、晴れて逢つても浮名の流れる、茅かやちよう町あたりの借屋に歸つて、吉原がえりの外套を、今しがた脱いだところ。姓氏は矢野弦光げんこうで、対あいて手とは四つ五つ長者である。

さし向つて、三馬とトルストイをごつちやに饒舌しやべる、翻譯者か
 らすれば、不埒ふらちともいうべき若いのは、想像でも知れた、辻町糸
 七。道づれなしに心中だけは仕兼ねない、身のまわり。ほうしよ
 の黒の五つ紋（借りもの）を鴨居かもいの釘に剥取はぎとられて、大名縞とて、

笑わせる、よれよれ銘仙めいせんの口綿一枚。素肌の寒さ。まだ雪しずくの干ひない足袋は、ぬれ草鞋わらじのように脱いだから、素足の冷たさ。実は、フランネルの手首までの襯衣しやつは着て出たが、洗濯をしないから、仇汚あだよごれて、且つその……言い憎いけれど、少し臭う。遊おいらん女に嫌われる、と昨宵ゆうべ行きがけに合乗あいのりぐるま俥こしの上で弦光がからかったのを、酔った勢い、幌ぼろの中で肌脱ぎに引きかなぐり、松源の池が横町にあるあたりで威勢よく、ただし、竜どころか、蚤のみの刺ほりもの青もなしに放り出した。後悔をしても追附おっつかない。で、弦光みついて、肩をすくめているのであった。

が、幸さいわいに窓は明あかるい。閉め込んだ障子も、ほんのりと桃色に、暈

も小庭の雪影に霞を敷いた。いま、忍川の日も紅を解き、藍染川の雲も次第に青く流れていよう。不しのばず忍の池の風情が思われる。

上野の山も、広小路にも、人と車と、一いつとき齊わに湧どよめき動揺ゆいて、

都大路を八方へ溢あふれる時、揚出しの鍋は百人の湯氣を立て、隣となり

近ぢかな汁粉屋、その氷月の小座敷には、閨秀二人が、雪も消えて、衣紋えもんも、褌つまも、春の色にやや緩とけたであろう。

先刻さつきに氷月の白い柳の裏木戸と、遠見の馬場の柵際と、相望さつきんでから、さて小半時経たっている。

崖下ながら、ここの屋根に日は当るが、軒ひさしも廂ひさしもまだ雫をしな
いから、狭いのに寂然しんとした平屋の奥の六畳に、火鉢からやや蒸い
気きが立たって、炭の新しいのが頼たのましい。小鍋立こなべだてというと洒落しやれに

見えるが、何、無精たらしい雇^{やとい}婆^{ばあ}さんの突掛^{つつか}けの膳^{ぜん}で、安も
 のの中皿^{なかつら}に、葱^{ねぎ}と莧^{こん}蕪^{やく} 蕪^{やく}ばかりが、堆^{うずたか}く、狩野派末法の山水を
 見せると、傍^{かたわら}に竹の皮の突張^{つっぱ}った、牛の並肉の朱^{あか}く溢^{はみ}出^でた処^{ところ}は、
 未来派尖銳の動物を思わせる。

二十二

「仰せにや及ぶべき。そうよ、誰も矢野がふられたとは言やしない。
 い。今朝——先刻^{さつき}のあの形は何だい。この人、帰したくない、と
 か云つて遊女^{おんな}が、その帯で引張^{ひっぱ}るか、階^{はしご}子^{だん}段^{だん}の下り口で、遁^にげ
 る、引く、くるくる廻つて、ぐいと胸で抱合^{きつ}つた機^{かけ}掛^{かけ}に、頬^{ほっぺ}

辺たを押お着ツけて、大きな結ゆい綿わたの紫が垂かれ掛かつているじゃないか。その顔で二人で私を見て、ニヤニヤはどうしたんだ、こつちは一人だけ。」

「そうづけけすとのおたまうな、はははは談じたまうなよ、息子は何でも内輪がいい。……まずお酌だ。」

いかな首尾だか、あのくらい雪にのめされながら、割合に元気なのは、帰宅早々婆さんを使い、角店の四方よもから一升徳利を通帳かよという不思議な通力で取寄せたからで。……これさえあれば、むかしも今も、狸だつて酒は吞める。

二人とも冷酒ひやで呷あおつた。

やがて、小形の長火鉢で、爛かんもつき、鍋も掛かつたのである。

「あれはね、いいかい、這般しやはんの瑣事さじはだ、雪折笹にむら雀むらすずという処を仕方ですやっただばかりなんだ。——除わりの二の段、方程式のほんの初歩しよさ。人の見ている前の所作しよなんぞ。——望む処は、ひけ過ぎの情夫まぶの三角術、三蒲団の微分積分を見せたかった……といううちにも、何しろ昨夜ゆうべは出来が悪いのさ。本来なら今朝の雪では、遊女おんなも化粧を朝直しと来て、青柳か湯豆腐とあろう処を、大戸を潜くぐつて、迎むかえも待たず、……それ、女中が来ると、祝儀が危い……。一目散に茶屋まで仲之町を切つて駆けこんだらう。お同伴つれは、と申すと、外套なし。」

「そいつは打殺ぶちころしたのを知つてる癖に。」

「萌きざした悪心の割前の軍用金、分つているよ、分つている……い

るだけに、五つ紋の雪びたしは一層あわれだ、しかも借りもの
と言つたつけかな。」

「春着に辛うじて算段した、にがせい苦生の一張羅さ。」

「苦生?……」

「知つてるじゃないか、月府玄蟬、弁持十二。」

「い好い、い好い。」

「並んだ中にいつも陰気で、じめじめして病人のようだからとい
つて、上杉先生が、おなじくあだな渾名して——くすり久須利、くせい苦生。」

「ああ、そう、久須利か。」

「くせえというようみなで悪いから、皆で、にがせい苦生、にがせい苦生だよ。」

「さてまたさぞにが苦る事だろう、ほうしよは折目ず摺れが激しいなあ。

ああ、おやおや、五つ紋の泡が浮いて、黒の流れに藍あゐが兀はげて出た処は、まるで、藍あゐ瓶がめの雪解だぜ。」

「奇絶、奇絶。——妙とお言いよ。」

「妙でないよ、また三馬か。」

「いい爛だ。そろそろ、トルストイ、ドストイフスキーが煮えて来た。」

「やけを言うなというに。そのから元気を見るにつけても、年下の息子を悩ませ、且つその友達を苦らせる、（一張羅だと聞けばかなしも。）我ながら情なさけない寂しい声だな。——懺悔ざんげをするがね。

茶屋で、「お傘を。」と言つたらう。——「お傘を」——家来どもが居並んだ処だと、この言ことばは殿様に通ずるんだ、それ、麻あさがみ

袴しもか、黒羽くろはぶたえ二重はかまお袴はかまで、すつと翳さす、姿は好いね。処ぢよをだよ。

……呼べば軒下くろままで俤くるまの自由まにつく処ぢよを、「お俤。」となぜいわない。「お傘。」と来ては、茶屋めが、お互の懐ふところ中を見透かした、俤くるま賃なし、と睨にらんだり、と思つたから、そこは意地だよ、見得みえもありか、土手まで雪見だ、と仲之町で袖を払つた。」

「私は、すぼめた。」

「ははは、借りものだっけな、皮肉をいうなよ。息子はおとなしく内輪うちわが好い。がつらつら思うに、茶屋の帳場は婆あばたさんか、痘痕あばたの亭主ていしゆに限ります。もつともそれじゃ、繁昌はんしやうはしまいがね。早いから女中はまだいびき躰しんで居る。名代の女房の色いろつぽいのが、長火鉢ながひやくの帳場奥ちやうばうから、寝乱ねみだれながら、艶々えんえんとした円まるまげ鬚げで、脛はぎも白やかに

起きてよ、達手巻ばかり、引掛けた羽織の裏にも起居の膝にも、
あさぎちりめん浅黄縮緬がちらちらしているんだ。」……

二十三

つれづれ草の作者に音が似ているから、法師とも人が呼ぶ、弦
 光法師は、盃さかずきを置き息をついて、

「しかも件くだんの艶なのが、あまつさえ大概番傘の処を、その浅黄を
 からめた白い手で、蛇目傘じやのめと来た。祝儀なしに借りられますか。
 且つまたこれを返す時の入費が可恐おそろしい。ここしばらくあてなし
 なんだからね。」

「そこで、雪の落^{おちゆうど}人となつたんだね。私は見得も外聞も要らない。なぜ、この降るのに傘を借りないだろうと、途中では怨みだけけれど、外套の頭巾をはずして被^{かぶ}せてくれたのには感謝した、
烏帽子^{えぼし}をつけたようで景気が直つた。」

「白く群がる朝返りの中で、土手を下りた処だったな。その頭巾の紐をしめながらどこで覚えたか——一段と烏帽子が似合いて候。——と器用な息子だ。しかも節なしはありがたかつた。やがて静の前に逢わせたいよ。」

「静といえば。」

「乗出すなよ。こいつ、昨夜の遊^{ゆうべ}女^{おいらん}か。」

「そんなものは名も知らない。てんで顔を見せないんだから。」

「自棄やけをいうなよ、そこが息子の辛抱どころだ。その遊女おんなに、馴染しみをつけて、このぬし辻町様（おん箸入）に、象牙が入つて、蝶足の膳につかなくつちや。……もつともこの箸、万客に通ずる事は、口紅と同じだがね、ははは。」

「おつて教授に預ろうよ。そんな事より、私のいうのは、昨夜ゆうべそれ引ひけ前まえを茶屋へのたり込んだ時、籠洋燈かごらんぶの傍わきで手紙を書いていた、巻紙に筆を持添えて……」

「写実、写実。」

「目の凜りんとした、一の字眉の、瓜実顔うりざねがおの、裳すそを引いたなり薄うすい片膝立てで黒縮緬の羽織を着ていた、芸妓島田げいこしまだの。」

「うむ、それだ。それは婀娜あだなり……それに似て、これは素研こうしよ

清楚うせいそなり、というのを不忍にんじんの池で。……」

と、半ば口で消して、

「さあ、お酌だ。重ねたり。」

「あれは、内芸者というんだらう。ために傘を遠慮した茶屋の女房むらなぞとは、較くらべものにならなかつたよ。」

「よくない、よくない量見だ。」

と、法師は大きく手を振って、

「原稿料じや当分のうち間に合いません。稿料しかず不如傘二本か。一本だと寺を退ひく坊主になるし、三本目には下り松か、遣やり切れない

。」

と握にぎりこぶし拳こぶしで、猫板ねこいたドンとやって、

「糸ちゃん！ お互にちつと植上げをする工夫はないかい。」

と、喟然きぜんとして歎じて、こんどは、ぐたりとその板へ肘ひじをつく。

「へい、へい、遅おそななわりましてござります。」

爪の黒ずんだ婆さんの、皺しわ頸くびへ垢手あかてぬぐい拭ぬぐを巻いたのが、乾からびた葡萄ぶどう豆まめを、小皿にして、元はげた汁椀を二つ添えて、盆を、ぬい、と突出した。片手に、旦那様穿はき換かえの古足袋を握っている。

「ああ、これだ。」と、喟然として歎じて、こんどは、畳へ手をついた。

この傭やとにさえ、弦光法師は配慮した。……俵賃には足りなくて、安肉四半斤……二十匁以上、三十匁以内だけの料はある。竹の皮包を土産らしく提げて帰れば、廓さとから空すき腹ばらだ、とは思うま

い。——内証だが、ここで糸七は実は焼芋を主張した。糧かてと温おんじ

石やくと凍餓共に救う、万全の策だったのである、けれども、いや

しくも文学者たるべきものの、紅玉ルビー、緑宝玉エメラルド、宝玉を秘め置く

べき胸から、黄色に焦げた香においを放つて、手を懐中ふところに暖めたとあ

つては、蕎麦屋そばやの、もり二杯の小婢の、ぼろ前垂まえだれの下に手首を

突込むのと軌を一にする、と云つて斥しりぞけた。良策の用いられざる

や、古今敗亡のそれこそ、軌を一にする処である。

が、途中まず無事に三橋まで引上げた。池の端となつて見たが

いい、時を得顔の梅柳が、行つたり来たり緋縮緬に、ゆうぜんに、

白いものをちらちらと、人を悩す朝である。はたそれ、二階の欄て

干すり、小窓などから、下界を覗のぞいて——野郎めが、「ああ降つたる

雪かな、あの二人のもの、簞みのを着れば景色になるのに。」——おんな婦
 めが、「なぜまた蜆しじみを売らないだろう。」と置炬燵おきごたつで、しらおな白魚
 鍋べでも突つつかれてみる、畜生！ 吹雪に倒るればと行って、黒堀
 の描割かきわりの下が通れるものか。——そこで、どんどんから忍川の
 柵内へ、池のまわり、雪の原へ迷込んだ次第であつたが。……

二十四

「ありがたい、この、汁レルから湯気が立つ。」
 と、味噌椀の蓋を落して、かぶりついた糸七が、
 「何だ、中味は芋※殻いもがらか、下手な翻訳みたいだね。」

「そういなよ、漂母の餐さんだよ。婆やの里から来たんだよ。」
 「それだから焼芋を主張したのに、ほぐして入れると直ぐに実みなる。」

「仲之町の芸者の噂のあとへ、それだけは、その、焼芋、焼芋だけはあやまるよ。」

と、弦光が頭つむりを下げた。

同感である。——糸七のおなじ話でも、紅玉ルビー、緑宝玉エメラルドだと取

次ばえ栄がするが、何分焼芋はあやまる。安っぽいばかりか、稚氣が

過ぎよう。近頃は作者なかま黽間も、ひとりぎめに偉くなつて、割前の

宴のみかい会の座敷でなく、我が家の大広間で、脇きょうそく息と名づくる殿

様道具の几おしまずきよに倚つて、近う……などと、若い人たちを頤あごで磨しまねく剽ひ

軽者ようきんもの さえあると聞く。灰ほのかに聞くにつけても、それらの面々の
 面目に係ると悪い。むかし、八里半、僭せんしよう称しょうして十三里、一名、
 書生の羊羹、ともいつた、ポテト……どうも脇息向の饌せんでない。

ついこの間の事——ある一大書店の支配人が見えた。関東名代の、
 強弓つよゆみの達者で、しかも苦勞人だと聞いたが違くない。……話の
 中に、田舎から十四で上京した時は、鍛冶町辺の金物屋へ小僧で
 子守に使われた。泥濘ぬかるみで、小銅五厘なりを拾った事がある。小銅五
 厘也、交番へ届けると、このお捌さばきが面白い、「若おはん、金きん鍰つばを食
 うが可よかッ。」勇んで飛込んだ菓子屋が、立派過ぎた。「余所よそへ
 行きな、金鍰一つは売られない。」という。そこで焼芋。

と、活機きつかけに作者が、

「三つ。」

声と共に、啊あうんの呼吸で、支配人が指を三本。……こうなると焼芋にも禅がある。

が、何しろ、煮豆だの、芋いも殻かだのと相並んで、婆ばあやが持出した膳ぜんもさめるし、新聞の座ざがさめる。ものが清新でないのである。

不精髯ぶしょうひげも大分のびた。一つ髪かみでも洗せんって来きようと、最近人にんに

教えられ、いくらか馴染なじみになった、有楽町辺へんの大石造館しやうくわん十三階、

地階ぢかいの床屋とこやへ行くと、お帽子ぼうしお外套こうとというも極きまりの悪い代しろものが

釘ぼたんで棚たなへ入いって、「お目金めがね、」と四度半よどはんが手近てばこな手函すわへ据する、齒は

科かのほかでは知らなかった、椅子いすがぜんまいでギギイぎぎいと巻ま上ある：

…といった勢いきおい。しゃぼんの泡は、糸七が吉原返りに緒をしめた雪の烏帽子ほどに被かぶさる。冷い香水がざつと流れる。どこか場末の床とこみせ店が、指の尖さきで、密そつとクリームを扱こいて掌てで広げて息で伸ばして、ちよんぼりと髯剃あとへ塗る手際などとは格別の沙汰で、しかもその場末より高くない。

お職人が念のために、分け目を熟じつと瞻みると、奴やつこ、いや、少年の助手が、肩から足の上まで刷毛はけを掛ける。「お鹿末様そまつさま。」「お世話でした。」と好いい気持になつて、扉ドアを出ると、大理石の床続きの隣、パール（真珠）と云うレストランに青衿せいぎん菫衣きんいの好女子ひとりあり、緑りよく扉ひに倚よりて佇たたずめり。

「番町さん。」

「……………」

「泉さん。」

驚いて縮めた近目の皺しわを、莞爾にっこり……でもって、鼻の下まで伸ばさせて、

「床屋へお入んなつたのを……どうもそうらしいと思つたもんですから、お帰り時分を待つていたの、寄つてらっしゃいよ。」

「は、いや、その。」

ああ、そうか、思い出した。この真珠パールの本店が築地かっぼうの割烹かっぼう懐石で、そこに、月並に、懇意なものえりぬの会がある。客が立込んだ時ここから選抜きえりぬで助けすに来た、その一人である。

「どこかへいらつしやる、ちよつと紅茶でも。」

めんくら
面喰あわただった慌あわしい中なかにも、忽然しつぜんとして、いつぞのむかし吉原の
横町の、ずるずる引摺ひきずった青あおい裳すそと、紅あかい扱しご帯きと、脂あぶら臭くさい吸すい
つけ煙草たばこを憶おも起おこすと、憶起おぼえおこす要いはないのに、独ひとりりで恥はしくな
つて、横よこを向むかいた。

「お可い厭や。」

「飛とんでもない。」

「ああら、ご挨拶あいさつ。」

「飛とんでもない。可い厭やなものかね。」

「お世辞せじのいいこと、熱あつ爛かんも存ぞんじております。どうぞ——さあ
いらつしやい。」

二十五

「人が見ては厭いやなんでしょう。お馴なれなさらない場所ですから。

——あいにく三組ばかり宴会があつて、多勢お見えになつていますから。……ああと……こつちが可いわ。」

拙者生れてより、今この年配としで、人見知りはしないというのに、さらさら三方をカーテンで囲つて、

「覗のぞいちゃ不可いけません。」

何事だろうと、布目を覗く若い娘こをたしなめて、内の障子より清純きれいだというのに、卓子掛てえぶるかけの上へ真新しいのをまた一枚敷いて、その上を撓しなつた指で一のし伸して、

「お紅茶？」

「いや、酒です、爛を熱く。」

「分っていますわ。」

「それから、勿論食べます。」

「お無駄をなさらないでも。」

「食べますとも、空腹です。そこで、お任せ、という処だけれど、鳥を。」

「蒸焼にしましょう、よく、火を通して。」

それまで御存じか、感謝を表して、一礼すると、もう居なくなる。

すつと入いれかわ交かわったのが、瞳めの大きい、色の白い、年の若い、あ

れは何と云うのか、引ひき緊しまったスカートで、肩かたが膨ふりと胴わが細こつて、腰ししの肉おき置き、しかも、その豊ゆたなかのがりりんとしてゐる。

「私も築地で……先日は。」

乳あのたりりのふくらみを卓テ子エに近く寄せて朗にかに莞つ爾こした。その装よは四よ辺そをおひいつて、泰西の物語に聞く、少年の騎ナ士イの爽さわにわかようろうだ。高靴かのかととの踵かかとの尖とがりを見ると、そのままポンと蹴けて、馬のに騎のつて、いきなり窓の外を、棟を飛んで、避雷針の上へ出そうに見える。

カーネーション、フリージャの陰へ、ひしやげた煙き管せを出して点つけようとしていたが、火マ燧ツをチパツとさし寄せられると、かかる騎士きしに対して、脂や下にるさ次第がには行ゆかない。雁が首んくを俯う向つけにし

て、内端うちわに吸いつけて、

「有難う。」

と、まず落着こうとして、ふと、さあ落着かれぬ。

「はてな、や、忘れた。」

「え。」

「下足札。」

吃驚びっくりしたように顔を見たが、

「そこに穿はいていらっしやるじゃないの。」

実は外套を預けた時、札を貰わなかったのを、うっかりと下足札。ああ、面目次第もない。

騎士ナイトが悟って、おかしがって、笑う事笑う事、上身をほとんど

旋廻して、よろい鎧のはらすじ腹筋をよ振る処へ、以前のが、銚子を持参。で、入れかわるように駆出した。

「お帽子もステッキ杖も、私が預ったじやありませんか。安心してめしあ

がれ。あの方、今日は会計係、がちやがちやん、ごとなの。…
…お酌をしますわ。」

やがて少々、とろりとなつて、「さてそこへ立つていちや、あ
あ成程——風紀上、もつとも尤です…と、従つて杯は。」

「さあ。（あたりを忍び目、カーテンばかり。）ちよつと一杯ひとつぐ
らい…お盃洗がなくて不可いけませんわね。」

「いや、特に感謝します、結構です。」

「あの、番町さん。私あの辺を知っていますわ。——学院の出で

すもの。」

「ほう、すると英学者だ、そのお酌では恐縮です、が超恐縮で、
 光荣です。」

焼を念入に注意したが、もう出来たろうと、そこで運出した
 一枚は、胸を引いて吃驚するほどな大皿に、添えものが堆く、鳥
 の片股かたもも、譬喩たとえはさもしろいが、それ、支配人が指を三本の焼芋を
 ひとつか
 一束ねにしたのに、ズキリと脚がついた処は、大江山の精進日
 の尾頭ほどある、ピカピカと小刀ナイフ、肉叉フォーク、これが見事に光るの
 で、呆れて見ていると、あがりにくくば、取分けて、で、折返し
 て小さめの、皿に、小形小刀の、肉叉がまたきらりと光る。

「ご念の入った事で……光荣です、ありがたい。」

「……お気にめして……おいしいこと。……まあ、嬉しい。それはね、手で持って、めしあがつて、結構よ。」

「構いませんか、そいつは可い、光栄です。」

おおせ
仰に従うと、口のまわりが……

「はい、お手拭。」

二十六

お会計はあちらで、がちやがちやがちゃんの方なんです……
ここで……分つていきますからと、鉛筆を軽く紙片に走らせた。

この会計だが、この分では、物価騰とうしよう 昇しょう 寒さの砌みぎり、堅かたずみ 炭三

河岸をぞめいているのであつたら、ここでぶツつりと数珠を切る
 処だ！……思えば、むかし、夥間なかもの飲友達の、遊び呆ほうけて、多しばら
くよりつ日寄附なかつた本郷の叔母さんの許もとを訪ねたのがあつた。お
 柏で寝る夜具より三倍ふつくらしした坐蒲団すわりぶとん。濃おいお茶が入つて、
 お前さんの好きな藤村の焼ぎんとんだよ、おあがり、今では宗旨
 が違ちがうかい。連れんじやく雀すずめの藪蕎麦やぶそばが近いから、あの佳味おいしいので一銚
 子こ、と言いわれて涙を流した。親身の情……これが無錢ただである。さ
 ても、どれほどの好いいおとこ男おとこに生れ交かわつて、どれほどの金子かねを使つ
 たら、遊あそんでこれだけ好遇もてるだろう。——しかるにもかかわらず、
 迷まよいは、その叔母さんに俵賃はつちを強請ゆすつて北廓なつかへ飛んだ。耽溺たんでき、
 痴乱ちらん、迷妄めいもうの余あまり、夢ゆめとも現うつともなく、「おれの葬とむらい礼らいはいつ

出る。」と云つて、無理心中かと、遊おいらん女を驚かし、二階中を騒がせた男がある。

これにつけ、またそれよ、壱岐殿坂で鼠の印いんを結んでより、雪の中を傘なしで、池の端まで、などと云うにつけても、天保銭を車に積んで切通しを飛んだ、思案入道殿の方が柄が大きい。……その意気や、仙台、紀文を凌りようが駕するものである。

と、大理石の建物にはあるまじき、ひよろひよるとした楽書らくがきの形になってたたずイむ処ほりに、お濠ほりの方から、円タクが、するすると流して来て、運転手台から、仰あおむ向けに指を三本出した。

「これだ。」

外套の袖を浮せて膝をたたいた。番町は、何のために、この床

屋へ来たんだ。あまりそこらに焼芋においの匂いがするから、気をかえよ
うと髪を洗いに来たのである。そうだ、焼芋の事を、ここにちな
んで（真珠）としよう。

ものは称呼となえも大事である。辻町糸七が、その時もし、真珠、と
云つて策を立てたら、弦光も即諾して、こま切ぎれ同然な竹の皮包は
持たなかつたに違いない。雪に真珠を食あに充て、真珠をもつて手
を暖むとせんか、含がんぎ玉よく鳳ほう炭たんの奢侈しゃし、蓋けだし開元天宝の豪華であ
る。

即時、その三本に二貫たして、円タクで帰つたが、さて、思う
に大分道草——（これも真珠としよう）——真珠を食つた。

茅町の弦光の借屋の膳の上には、芋がらの汁と、葡萄豆ほっち

り、牛鍋には糸蕨ばかりが、火だけは盛だから炎天の蚯蚓みみずのようだ、焦げて残っている、と云った処で、真珠を食ったあとだから、気が驕おごって、そんなものには、構っておられん。

本文を取急ごう。

その主意たるや、要するに矢野弦光が、その日、今朝、真しんもつて、月村一雪、お京さんの雪の姿に惚れたのである。

一升徳利の転がったを枕にして、投足の片膝組みの仰向けで、酒の酔を陰に沈めて、天井を睨んでいたのが、むっくり、がぼと起きると、どたりと凭掛よりかかったまま、窓下の机をハタと打った。

崖下の雪解の音は余所よそよりも。……

いま、障子外の雨落の雫しずくがこの響きで刎はねそうであった。

「糸的^{ことう}。」

「ええ、驚いた。」

この方は、袖よじれに横倒れで、鉄張りの煙管を持った手を投出したまま、吸殻を忘れたらしい、畳に焼焦——最も紳士の恥ずべきこと——を拵^{こしら}えながら、うとうととしていた。

「呼んだぐらいで驚いてくれちや困る。よ、糸的^{ことう}、いい名だなあ、従兄弟^{いとこ}に聞えて、親身^{いとこ}のようだ。そのつもりで聞いてくれよ。あ、私は実は酔わん、酔えなかつたんだよ。生れて三十年にして、いま目が覚めた。——ついてはだ。」

「——賛成だ、至極いいよ。私たち風来とは違って、矢野には学士の肩書がある。——御縁談は、と来ると、悪く老成おやしじみるが仕方がない……として、わけなく絡まとまるだろうと思うがね、実はこのお取次は、私じゃ不可まずいよ。」

「そう、そう、そう来るだろうと思つたんだ。が、こうなれば刺違ちがえても今更系的こうに譲つて、指くわを銜くわえて、引込ひっこみはしない。」

と、わざとらしいまで、膝の上で拳こぶしを握ると、糸七は氣けもない顔で、

「何を刺違えるんだ、間違えているんだろう。」

「だってそうじゃないか、いつか雑誌に写真が出ていたそうだが、

そんなものはほとんど眼中になかった。今朝の雪は不意打ぎ。俵で帰ると、追分で一生の道が南北へ分れるのを、ほんとうに一呼吸という処で、不思議な縁で……どうも言う事が甘ったるいが、どうもどうも、腹の底まで汁粉に化けた。

——氷月の雪の枝折戸を、片手ざしの洩蛇目傘で、衝いて入るように褌つまを上げた雨衣あまぐの裾の板じめだか、鹿子絞りだか、あの緋色がよ、またただ美しさじゃない、清さ、と云つたら。……ここをいうのだ、茶屋の女房の浅黄縮緬のちらちらなぞは、突つくるみものの寄切よせぎれだよ、……目も覚め、心に沁むねみようじゃないか。

……同時に、時々ともだちの出入りとまでしばしばでなくても、同門の友輩ともだちで知合つてる糸的こしうが、少くとも、岡惚れを。」

「その事かい、何だ。」

と笑いもカラカラと五徳に響いて、煙管を払いた。

「あいて対手は素人だ、はばか憚りながら。」

「ゆうべ昨夜振られてもかい。」

「勿論。」

「直言を感謝す。」

と俯向うつむいて、袖口をのばすように膝に手を長く置き、

「人さか壮なる時は、娘に勝ち、人衰さかうる時は女房が欲しい。……

その意気だ。が、そうすると、話に乗ってくれるのに、また何が不都合だろう。」

「月村しゅうむらと性しょうが合わないんだ。先方さきは言うまでもなかろうが、私も

虫が好かないんだ。前にね、月村が随筆を書いた事がある。燈籠見に誘われて、はじめて廓を覗いたというんだがね、雑誌の編輯でも、女というと優待するよ。——年方の挿絵でね、編中の見物の中に月村の似顔の娘が立っている。」

「素晴らしいね。早速捜そう。」

「見るんなら内にあるよ。その随筆だがね、足が土についていない。お高く中洲の中二階、いや三階あたりに。——政党出の府会議員——一雪の親だよ——その令嬢が、自分一人。女は生れさえすりや誰でも処女だ、純潔だのに、一人で純潔がつて廓の売色を、汚れた、頰れた、浅ましい、とその上に、余計な事を、あわれがつて、慈善家がつて、異う済まして、ツンと気取った。」

「おおおお念入りだ。」

「そいつが癩しやくに障さつたから。——折まから、焼芋やきいも（訂正）真珠を、食か過ぎたせいとか、私が脚か気けになつてね。」

「色いろ気けがないなあ。」

「祖と母しよりに小豆あずきを煮にて貰もらつて、三度さんど、三度さんど。」

「止よせよ、……今いま、酒さけを追お加そする……小豆あずきは意い気けを銷しょう沈ちんせしめる。」

「意い気け銷しょう沈しんより脚か気け衝しょう心しんが可こ恐おそかつたんだ。——そこで、その小豆あずきを喰くいながら、私わらが、売う女によなら、どうしよつてんだい、小ち姐いねえさん、内うち々ねえの紐ひもが、ぶら下ぶらつたり、爪つめの掃は除じよをししない方が、余よ程ほど汚よごれた、頹たれた、浅あましい。……塩しほみがきの私わたしらを大きおきに

お世話だ、お茶でもあがれ、とべっかつこをして見せた。」

「そうだろう、べっかつこでなくつちや筋は通らない。まともに弁じて、汚れた売女を憎んだのじゃない、あわれんだに……無理はないから。」

「勿論、つけた題が『べっかつこ。』さ——」

「見たいな、糸七……本名か。」

「まさか——署名は——江戸町河岸の、紫。おなじ雑誌の翌月の雑録さ。令嬢は随。……野郎は雑。——編輯部の取扱いが違うんだ。」

「辛うじて一坂越したよ、お互に、静かに、静かに。」

弦光は一息ふツ、日のあたる窓下の机の埃ほこりを吹き、吹いた後を

絹切で掃^{はら}った。

二十八

「それでも、上杉先生の、詞成堂——台町の山の屋敷の庭続き崖下にある破^{やれ}借家……矢野も二三度遊びに行つたね、あの塾の、小部屋小部屋に割居して、世間ものの活字にはまだ一度も文選されない、雑誌の半面、新聞の五行でも、そいつを狙つて、鷹の目、梟^{ふくろう}の爪で、待機中の友達^まのね、墨色の薄いのと、字の拙^{まず}いのばかり、先生にまだしも叱正を得て、色の恋のと、少しばかり甘たれかかると、たちまち朱筆の一棒を啖^{くら}うだけで、気の吐きどころの

ない、嶋ぐうを負う虎、壁裏の蝙蝠こうもり、穴あなごもり籠籠の熊か、中には瓜子うりこという可憐なものも、気ばかり手負の荒猪あらししだろう。

見す見す一雪女史に先せんを越されて、畜生め、でいる処へ、私のその『べつかっこ』だ、行やつた！ 行やつた！ 痛快！ などと喝采だから、内々得意でいたつけが——一日あるひ、久しく御不沙汰で、台町へ機嫌伺いに出た処が、三和土たたくに、見馴れた二足の下駄が揃えてある。先生お出掛けらしい。玄関には下の塾から交代の当番で、弁持十二が居るのさ。日曜だったし……すぐの座敷で、先生は箆筒たんすの前で着換えの最中、博多の帯をきりりと緊しまつた処なんだ。令夫人は藤色の手柄の高こうとう尚まるまげな円鬘まるまげで袴つぎひざを持って支膝つぎひざという処へ、敷居越にこの面つらが、ヌツと出た、と思いたまえ。」

「その顔だね。」

「この面だ。^{つら}——今朝なぞは特に拙いよ。「糸。」縮んだよ、先生の声が激しい。「お前、中洲のお京の悪口を書いたそうだな。」いきなりだろう、へどもどした。「は、いえ、別に。」「何、何を……悪気はない。悪気がなくって、悪^{あつこう}口を、何だ、洒落^{しゃれ}だ。黙んな、黙んな。洒落は一^{ひとかど}廉の人間のする事、云う事だ。そのつらで洒落なんぞ、第一読者に対して無礼だよ。べっかつこが聞いて呆れる。そのべっかつこという面を俺の前へ出して見ろ。うわさに聞けば、友子づれで、吉原の河岸をせせつて。格子へ飛びつくというから、だぼ沙魚^{はぜ}のようになりやがった。——弁持……」十二のくすくす笑っているのを呼びかけて、「溝^{どぶ}をせせつて、格

子へ飛びつくのは、だぼ沙魚じゃない……お前はよく、くだらな
 い事を知っている、何だっけな。」弁持が鹿爪らしく、「は、飛と
 沙魚びはぜです、は。」「飛沙魚だ、贅ぜいたく沢だ。もぐり沙魚の子ぼうふら子だ。
 ——先方さきは女だ、娘だよ。可哀そうに、（口惜くやしいか、）と俺が聞
 いたら、（恥かしい、）と云つて、ほろりとしたんだ、袖で顔を
 隠したよ。子子め、女だつて友だちだ、頼みある夥なかま間じゃないか。
 黒髪を腰へ捌さばいた、緋ひ緘おとしの若い女が、敵の城へ一番乗で扉際へ
 着いた処を、子子が這はい上あがつて、乳の下を擦くすぐつて、同じ溝どぶの中へ
 引込むんだ。」と……」

「分つた、もう可いい、もう可いい。」

と弦光は膝も浮きそうに、火鉢の向うで、肩をわななかせて、

手を振った。

「雪のごとき、玉のごとき、乳の下を……串じょうだん戯だんにしろ、話にしろ、ものの譬たとえ喩えいにしろ、聞きいちやおられん。私わたしには、今こん日にち、今こん朝ちようよりの私わたしには——はははははは。」

寂しい笑いで、

「話はおかしいが、大心配な事が出来た。糸こ的ていの先生、上杉さんは、その様子じや大分一雪女史ひいきが鼻はな夙しやくらしい。あの容きり色しよくで、しんなりと肩かたで嬌あま態たいえて、机この傍そばよ。先生が二階の時などは、令夫人おだやかやや穩おだやかならずというんじやないかな。」

「串じょうだん戯だんじやない、片田舎かたがはの面お瘡きずだらけの心こ得とち違ちがいの教員けういんなぞじやあるまいし、女の弟子でしを。失礼しつれいだ。」

「失礼、結構、失礼で安心した。しかし、一言でそうむきになつて、腰のものを振廻すなよ。だから振られるんだ、遊おいらん女持てのしない小道具だ。淀屋よどやか何か知らないが、黒の合羽張かっぱはりの両ふたつき提げの煙草入たばこいれ、火皿までついてるが、何じや、塾じや揃そろいかい。」

「先生に貰つたんだ。弁持と二人さ、あとは巻まき蓆たばこだからね。」

「何しろ真田さなだの郎党かぐが秘かくし持もつた張拔たんづつの短銃たんづつと来て、物騒だ。」

「こんなものを物騒がって、一雪を細君に……しつかりおしよ。

月村はね、駿河台へ通つて、依田学海翁に学んでゐるんだ。」

と居直つた。

「学海翁に。」

弦光は瞪とうもく目一番した。

「まさか剣術じゃあるまいな。それじゃ、僧正坊の術譲りと……
そうか、言わずとも白氏文集。さもありません、これぞ淑女のたし
なむ処よ。」

「違う違う、稗史はいしだそうだ。」

「まさか、金瓶梅きんぺいばい……」

「紅楼夢こうろうむかも知れないよ。」

「何だ、紅楼夢だ。清代しん第一の艶書、翁が得意だと聞いてはいる

が、待った、待った。」

と上目づかいに、酒の呼吸いきを、ふつと吐いて、

「学海いっせつにこうろうむをとく説一雪紅樓夢——待った、待った、第一の艶書を、

あの娘こに説かれては穩かでない。」

「教ゆ。授く。」

「……教ゆ。授く。気になる、気になる。」

「施す。」

「……施す、妙だ。いや、待った。待った。」

と掌てのひらで押えて留めるとともに、今度は、ぐつと深く目を瞑つむって、

「学海施一雪紅樓夢——や不可いけねえ。あの髯ひげが白い頸えり脚あしへ触るよ

うだ。女教員渚の方は閑話休題として、前刻さつき入って行った氷月の

小座敷に天狗てんぐの面でも掛かつていやしないか、悪く捻ひねつて払子ほつすなぞが。大変だ、胸がどきどきして来たぞ。」

弦光はわざとらしく胸をわななかせたと思うと、その胸を反そらし、暈たま後うしろへ両の手をどさんと支ついた。

「安心するがいい。誰が紅樓夢だときめたよ、一人で慌あわてているんじゃないか。一雪の習なつてるのは水滸すいこ伝でんだとき、白文はくぶんでね。」

「何、水滸すいこ伝でん。はてな、妙齡めうれいの姿色、忽こつ然ねんとして劍けん俠きやう下地げちだ、うっかりしちやいられない。」

と面おもてを正しく、口元くちもとを緊しめて坐り直し、

「寝ねているうちに、ヒ首ひしゆが飛とんで首くびを攫さらうんだ、恐おそるべし……どころでない、魂こん魄ぱくをひよいと掴つかんで、血ちの道の薬くすりに持もつて行いく。

それも、もう他^{ひとごと}事ではない、既に今朝の雪の朝茶の子に、肝ま
で抜かれて、ぐったりとしているんだ。聞けば聞得で、なお有難
い。その様子じゃ——調ったとして婚礼の時は、薙^{なぎ}刀^{なた}の先払い、
新夫人は錦^{にしき}の帯に守刀というんだね。夢にでも見たいよ、そんな
のを。……

……といううちにも、糸^こ的^う、糸^き的^みはひとりで目の覚めた顔をし
て澄ましているが、内で話した、外で逢ったという気^け振^{ぶり}も見せな
い癖に、よく、そんな、……お京さんいい名だなあ、その娘^この駿
河台の研学の科目なぞを知っているね。あいつ、高慢だことの、
ツンとしているのと、口でけなして何とかじやないのかい。刺違
えるならここで頼む。お互に怪我はしても、生^{いのち}命^ちに別条のない決

闘なら、立たちどころ 処ところ にしようと言うんだ。俺はもう目が据すわっている、

真剣だよ。」

「対あいて手にならないが、次第わげは話そう。——それ、弁持の甘き、月府の酸すきさ、誰たれ某それと……久須利苦生の苦きに至るまで、目下、素人堅気輩には用なしだ。誰が売くろうと女にに好かれるか、それは知らないけれどもだよ。——塾の中に一人、自ら、新派の伊井蓉峰ようほうに「似てるです。」と云って、頤あごを撫なでる色白な鼻の突出た男がいる。映山先生が洩もれ聞いてね、渾名あだなして、曰く——荷高似内にたかにない——何だか勘平と伴内を捏こね合わせたようだけれど、おもしろかろう。ところがこれだけが素人ばりの、大の、しんし。」

「大のしんし、いい許とこの息子、金きんありかい。」

「お互に懐中は寂しいね、一杯おつぎよ、満々と。しんしと聞いていい許の息子かは慌て過ぎる、大晦日おおみそかに財布を落したようだ。簇しんしだよ、張物に使う。……押を強く張る事経師屋以上でね。着想に、文章に、共鳴するとか何とか唱えて、この男ばかりが、ちよいちよい、中洲の月村へ出向くのさ。隅田おおかわに向いた中二階で、蔣まぎえ絵の小机の前を白魚船しろおがすぐ通る、欄干もたに凭れて、二人で月を視みた、などと云う、これが、駿河台へ行く一雪の日取まで知っているんだ。

黙だんまりでは相済まないと思つて、「先生わたくし、私も、京子とともに無点本の水滸伝。」上杉先生が、「その隙ひまに、すいとんか、おでんを売れ。」「ははっ。」とこそは荷高似内、口をへの字に頤あごの下

まで結んで鼻を一すすり、無念の思入で畳をすごすごと退る処は、旧派の花道の引込みさ。」

「三枚目だな、我がお京さんを誰だと思うよ、取るに足らず。すると、まず、どこにも敵の心配はなしか。」

「……ところがあつある、あるんだ！ 一人あつある。」

弦光は猫板に握拳を、むずと出して、

「驚破、驚破、その短銃という煙草入を意気込んで持直した、いざとなると、やつぱり、辻町が敵なのか。」

「噴出さしちや不可いぜ。私は最初から、気にも留めていながつた、まつたくだ。いまこう真剣となると、黙つちやいられない。」

対手がある、美芸青雲派の、矢野も知つてる名高い絵工だ。」

三十

「——野^の土^{づち}青^{せい}麟^{りん}だよ。」

「あ、野土青麟か。」

「うむ、野土青麟だ。およそ世の中に可^い厭^やな奴^{やつ}。」

「当代無^き類^ざの気障^{きざ}だ。」

声を逸^{はや}つて、言うとともに、火鉢越に二人が思わず握手した。

(……ふと思うと、前段に述べた、作者が、真^や珠^{きい}三^{みつ}枚^つで、書店の支配人と、ばらりの調子で声と指を合わせたと、趣^{ひと}を齊^{ひと}しゆうする。)

「絵だけ描いていれば、当人も世間も助かるものを、紫の太緒ふとひもを胸高々と、紋緞子もんどんすの袴はかまを引摺ひきずつて、他ひとが油断をしようものなら、白襟を重ねて出やがる。齒莖まつくろが真黒だというが。」

この弦光の言、——聞くべし、特説なり也。

「乱杭、齒かくしくそ隠かの鉄漿かねをつけて、どうだい、その状さまで、全国の女子の服装を改良しようの、音楽を古代かえに回すの、美術をどうのと、鼻さきの尖さきで議論をして、舌で世間を嘗なめやがる。爪垢つまあかで楽譜を汚して、万葉、古今を、あの臭い息で笛で吹くんだ。生命いのち知らずが、誰にも解りうたこないから、歌を一つ一つ、異変、畜類な声を張り、高らかに唱うたつて、続くは横笛、ひやらひゆで、緞子袴の膝たを敲たたくと、一座みまわをし、ほほほ、と笑つて、おほん、と反るんだ。

堪たまらないと言つちやない。あいつ、鱗を改めて鱗うろことすればいい、

青大将め。——聞けばそいつが（次第前後す、段々解る）その三崎町のお伽堂とかで蟠とぐろを巻いて黒い舌をべらべらとやるのかい。」

「横笛は、八本の調子を、もう一本上げたいほど高い処で張つて
るのさ。貸本屋へしけ込むのは、道士逸いっじん人、どれも膏あぶらぎ切つた
髑しやれこうべ髑とと、竹如意ちくによいなんだよ——「ちとお慰みにごらん遊ばせ

。」——などとお時の声色をそのまま、手や肩へ貸本ぐるみしな
だれかかる。女房がまた、背筋や袖をしなり、くなり、自由に揉も
まれながら、どうだい頬辺ほっぺたと膝へ、道士、逸人の面を附着くっつけたま
まで、口絵の色つぽい処を見せる、ゆうぜんが溢はみで出るなどは、地
獄変相、極楽、いや天国変態の図だ。」

「図かい。」

「図だよ。」

「見料は高かろう。」

「高い、何、見料どころか、この図を視ながら、ちよんぼり髯ひげの亭主が、「えへへ、ご壮さかんな事ことだい。」勢いきおいの趣おもしろくところ、とうとう

袴はを穿はいて、辻の角の（安旅籠やすはたご）へ、両画伯を招待さ……「見

苦しゅうはごわすが、料理店は余り露骨……」料理屋の余り露骨

は可訝おかしいがね、腰掛同然の店だからさ、そこから、むすび針魚さより

の腕わん、赤貝の酢などという代表的なやつを並べると、お時が店を

しめて、台所から、これが、どうだい葛籠つづらに秘め置いた小紋の小

袖そでに、繻珍しゅちんの帯という扮装いでたちで画伯えびつご所望まねだれの前垂まへたれをはずしてお

取持さ。色紙、短冊、扇面、紙本、立どころに、雨となり、雲となり……いや少し慎もう……竹となり、蘭となる。……情流既に枯渴して、今はただ金慾きんよく、野やを燎やく髯だからね。向うの写真館の、それ「三大画伯お写真。」へは、三崎座の看板前、大道の皿廻しほどには人だかりがするんだから、考えたんだよ。

（——これ皆、中洲を伺い、三崎町を覗く、荷高似内の見聞して報ずるところさ。）

ところで、青麟——青麟と中洲の関係は、はじめ、ただ、貸本屋から本を借りるには、帳面へ、所番地きまりを控える常規だ。きつと、馴染か、その時が初めかは分らないが、店頭みせさきで見たお嬢さんの住居すまいも名も、すぐ分るだろう、というので、誰に見せる気だか薄う

化粧すげつて。」

「白粉おしろいを?……遣るだろう!」

「すぼめ口に紅をつけて「ほほほ景気はどうかね。」とお伽堂へ一人で青麟あらいが頭あわれたそうだ。この方は、女房の手にも足にも触りっこなし、傍へ寄ろうともしない澄まし方、納まり方だそうだが、見ていると、むかつとする、離れていても胸が悪い、口をきかれると、虫唾むしずが走る、ほほほ、と笑われると、ぐ、ぐ、と我知らず、お時が胸へ嘔こみあ上げて、あとで黄色い水を吐く……」

「聞いちやおられん、そ、そいつが我がお京さんを。」

「痛い、痛い。」

「あ、何度めだい、また握手した。糸こ的ちようもよく一息に饒舌しゃべつたな

あ。」

三十一

「まず握手を解こう。両方がこう意気込んでは、青麟輩に——断つて置くが、意地にも我慢にも、所得は違うが——彼等に対して、いやしくも、糸七、弦光二人掛がりのようで癪がに障る。そこで、大切なその話はどうなったんだい。」

「……いずれ、その安料理屋へ青麟を請し待う待だい。こいつは、あと二人より大分に値が違がうそうだからね。その節は、席を改めまして、が、富士見楼どころだろう。お伽堂の亭主の策略さ。」

そこへ、愛読くるまの俵、一つ飛べば敬拝の馬車に乗せて、今を花形の女義太夫もどきで中洲の中二階から、一雪をおびき出す。」

「三崎町へ、いいえさ、地獄変相の図の中へな、ううう。」

「せき込むなよ……という事も出来るし、亭主がまた髯ひねを捻ひねつて、

「先方御親父しんぶが、府会議員とごわすれば、直接に打附ぶつかつて見るも手廻しが早いでごわす。久しく県庁に勤めたで、大なり、小なり議員を扱う手心も承知でごわす。」などという段取になつてゐるぞうだ。」

弦光がこの時、腕こまぬを拱こまぬいた。

「少うるさからず煩うるさいな、いつからだね、そんな事のはじまつてるのは

。」

「初冬から年末……ははは、いやに仲人染みたぜ……そちこち以来だ
そうだ。」

「……だそうじゃ不可いけないよ、冷淡だよ、友達が効がいのない。」

「頼まれたのは、今日はじめてじゃないか。」

「それにしても冷淡過ぎるよ。——したたかに中洲へ魔手が伸び
ているのに。」

「私は中洲が煮て喰われようが、焼いて……不可いけない、人道の問題
だ。ただし、呼出されようが、出されまいが、喰わそうが喰わす
まいが、一雪の勝手だから、そんな事は構まつちやいられん。……
不首尾重つて途絶えているけれど、中洲より洲崎すさきの遊女おんなが大切な
んだ。しかし、心配は要るまいと思う。荷高の偵察によれば——

不思議な日、不思議な場合、得も知れない悪臭い汚いしたたり点滴が頬を汚して、一雪が、お伽堂へ駆込んだ時、あとで中洲の背後へ覆お被いかぶさった三人の中にも、青麟の黒い舌の臭気が頬にかかった臭さと同じだ、というのを、荷高が、またお時から、又聞またぎき、孫引に聞いている。お時でさえ黄水を吐く。一雪は舐なめられると血を吐くだろう、話にはなりやしないよ。」

弦光は案じ入って、立たちどころ処とに年を取ること十とおばかり。

「いやいや、そうでない。すべて悲劇はそこから起る。不思議に、そんな縁の——万々一あるまいが——結ばる事が、事実としてありかねない。予感が良くない。胸が騒ぐ。……糸ちゃん、すぐにもお伽堂とかへ行つて。」

「そいつは、そいつは不可い……」

「なぜだよ、どうもお伽堂というのは、糸的ことうの知合からはじまつた事らしいのに、妙に自分を除外して、荷高ばかりを廻しているし、第一、中洲がだね、二三度、その店へ行きながら、糸的ことうのうわさなぞをしないらしいのは、おかしいじゃないか。」

「ちつともしない、何にも言わない。またこつちも、うわさなんかして貰いたくないんだよ。」

——（様子を見ると、仔細しさいは什いかに、京子が『たそがれ』を借りた事など、女房は、それに一言も及ばぬらしい。）——

「ただ、いかんせん、亭主に高利の借がある。催促が厳しいんだ。亭主の催促が厳しいのに——そこを蔭になり、日向になり、「あ

なたア」などとその目でじろりと遣るだろう……白肉の柔い楯たてになつて、庇かばつてくれようという——女房を、その上に、近い頃また痛めつけた。」

「誰だい、髑髏かい、竹如意かい。」

「また急せきこ込むよ。中洲の話になつてからというものは、どうも、骨董こつとうはあせつて不可いけない。話の続きでも知れてるじゃないか。……

……高利の借りぬし、かくいう牛骨、私とそれに弁持十二さ。」

「何だ二人でか、まさか、そんな竹如意、髑髏の亜流のごとき……」

「黙るよ、私は。失礼な、素人を馬鹿な、誰が失礼を。」

「はやまった、言ことばのはずみだ、逸外はやまつた。その短銃たんづつを、すぐに

引ひっつか搦つかんで引金を捻ひねくるから殺風景だ。」

「けれどもね。実は、その時の光景というのが、短銃と短刀同然だったよ。弁持と二人で、女房を引ひっぱ挟さんで。」

と行って、苦笑した。

三十二

「——何ね、義理と附合で、弁持と二人で出掛けなくちやならな
い葬とむら式いがあつた、青山の奥の裏寺さ。不断は不断、お儀式の時
の、先生のいいつけが厳しい。……というのは羽織袴です——弁
持も私も、銀行は同一取引おなじの資産家だから、出掛けに、捨利すてりで一

着に及んだ礼服を、返りがけに質屋の店さきで、腰を掛けながら引剥ぐと、江戸川べりの冬空に——いいかね——青山から、歩行で一度中の橋手前の銀行へ寄つたんだ。——着流と来て、袂へ入れた、例の菓子さ、紫蘇入の塩竈が両提の煙草入と一所にぶらぶら、自莢の実で風に驚く……端錢もない、お葬式で無常は感じる、ここが隅田で、小夜時雨、浅草寺の鐘の声だと、身投げをすべき処だけけど、凡夫壮にして真昼間午後一時、風は吹いても日和はよしと……どうしても両国を乗越さないじや納まらない。弁持も洲崎に馴染があつてね、洲崎の塩竈……松風空風遊びという、菓子台一枚で、女人とともに涅槃に入ろう。……その一枚とさえいう処を、台ばかり。……菓子はこれだ、と袂

から二人揃つて、件の塩竈を二包。……こいつには、笹川の劍士、
 平手造酒ひらてのみきの片腕より女郎が反るそぜ、痛快！ となつた処で——端
 錢もない。

ほかに工面のしようがないので、お伽堂へ大だんびら刀さ。

三崎町の土手を行つたり来たり、お伽堂の裏手になる。……な
 まじつか蘆あしがばらばらだから、直ぐ汐しおいり入の土手が目先にちらつ
 いて、気は逸はやるが、亭主が危い。……古本漁あさりに留守の様子は知
 ってるけれど、鉄壺かなつぽまなこ眼めが光つては、と跣しやがむわ、首を伸ばすわ
 で、幸いあいてる腰窓から窺うかがつて、大丈夫。店前みせさきへ廻ると、

「いい話がある、内証だ。」といきなり女房を茶の間へ連込むと、
 長火鉢の向うへ坐るか坐らないに、「達引たてひけよや。」と身構えた。

「ありませんわ。」極きまつてら。「そこだ。」というのと、言合わせ
 たように、両方から詰寄るのと、両提から鉄砲張てっぽうばりを、兩人、と
 もに引抜くのとほとんど同時さ、「身体からだから借りたいんだ。」
 「あれえ、」といったぜ。いやみな色気だ、袖屏風そでびょうぶで倒れやが
 る、片膝はみ出させた、蹴出けだしでね。「騒もんくぐな。」と言句ことごとは凄すごい
 ぜ、が、二人とも左右に遁にげてね、さて、身体から珊瑚さんごの五分珠ごぶだま
 という釵かんざしを借りたんだがね。……この方の催促は、またそれ亭主
 が妬やくといういやなものが搦からんでさ、髻たぶさを掴つかんで、引きずつて、
 火箸ひばしで打ぶたれました、などと手紙を寄越す、田舎芝居の賣場があ
 るから。」

「いや、はや、どうも。いや、どうも。」

屋根の雪がずるずると、窓下へ、どしんと響く。

弦光は坐り直して、

「出直しだ、出直しだ。この上はただ、偏ひとえに上杉さんに頼むんだ。

……と云つて俺おれも若いものよ。あの娘こを拜むとも言いたくないから、似合にいだとか、頃合にいだとか、そこは何とか、糸き的の心づもりで、糸き的の心からこの縁談を思いついたようによ、な、上杉さんに。」

「分つたよ。」

「直ぐにも頼む、もう、あの娘は俺の命だから、あの娘なしには半日も——午砲どん！　までも生きられない。うむむ。」

うむと唸うなつて、徳利を枕にごろんとなると、辻すべつた徳利が勃然むっく

と起き、弦光の頸ほんのくぼ窪くぼはころんと亙へりつて、畳の縁へりで頭を抱える。
 「討死したな。……何も功德だ、すぐにも先生の許ところへ駆附つけけよう。
 ——湯に行きたいな。」

「勿論よ。清めてくれ。——婆や、湯に行く支度だ。婆や婆や。」

「ふええ。」

「あれだ、聞いたか——池の端茅町の声でないよ、麻布狸穴まみあなの音おんだ。ああ、返事と一所に、鶯を聞きたいなあ。」

やがて、水の流ながれを前にして、眩まぼゆい日南ひなたの糸桜いとざくらに、燦さん々と雪の
 咲あいた、暖簾のれんの藍あもぱつと明あかるい、桜湯の前へ立った。

「糸ちゃん、望みが叶うと、よ、もやいの石しや鹼ぼんなんか使わせや
 しない。お京さんの肌の香かぐが芬ぶんとする、女持こばこの小函こばこをわざと持た

せてあげるよ。」

悚然として、糸七は不思議に女の肌を感じた。

「昨夜ふられているんだい。」

「おや。」

背中を、どしんと撲わせた。

「こいつ、こいつ。——しかし、さすがに上杉先生のお仕込みだ、もてたと言わない。何だ、見ろ。耳朶みみたぶに女の髪の毛が巻きついて、いるじゃないか。」

「頭巾を借りて被ったから、矢野きみのだよ。ああ、何だか、急に、むずむずする。」

「長いなあ、長い、細い、真漆まうるし。……口惜くやしいが、俺のはこんな

美人じゃない。待てここは二瀬よ。藍染川へ、忍川へ……流すは惜しい、桜の枝へ……」——

桜の枝が、たよたよして、しずれ落ちに雪がさらさらと落ちて、巻きかけた一筋のその黒髪の丈を包んだ。

上野の山の松杉の遠く真ま白しろな中から、柳が青く綾あやに流れて、御堂みどうの棟は日の光紫に、あの氷月の背戸あたり、雪の陽炎かげろう幻の薄絹かけて、紅くれないの花が、二つ、三つ。

三十三

辻町糸七は、ぽかんとしていた仕入もの、小机わきの傍わきの、火もな

い^{ろばた} 灼^ろ辺^{ばた}から、縁を飛んで——^{はだし} 跣^は足^{だし}で逃^にげ^げた。

逃^にげ^げた庭——庭などとは贅^{ぜい}の言分。放題の荒地で、雑草は、や
がて人だけに生^{おい}茂^{しげ}つた、上へ伸^のび、下を這^はつて、芥^{ごみ}穴^{あな}を自然
に躍^はつた、怪^{あや}しき精のごとき南^か瓜^ぼの種^{ちや}が、いつしか一面に生^おえ
拡^{ひろ}がり、縦横無^は尽^びに蔓^はり乱^みれて、十三夜が近いというのに、今が
黄色な花^{はな}ざかり。花盛^{はな}りで一^いつも実^みのない、ない実^みの、そのあつ
て可^いい実^みの数^{かず}ほど、大^おきな蝦^が蟄^まがのそのそと這^はい^あり^く。

歌俳諧や絵につかう花野茅原とは品^{おの}変^ずつて、自^{おの}から野^の武^ぶ士^しの殺^{ころ}
氣^こが籠^{こも}るのであるから、蝶々も近^{ちか}づか^かない。赤^{あか}蜻^{とん}蛉^ぼもツイとそ
れて、尾^お花^なの上^うから視^みめ^めて^いる。……その薄^{すす}さ^きえ、垣^{かき}根^ねの隅^{ぐま}に忍^{しの}
ぶばかり、南^い瓜^きの勢^{いき}は逞^{たく}しく、葉^はの一枚^{まい}も、鳥^{とり}を組^くんで伏^ふせそ^う

である。

——遠くに居る家主が、かつて適切なる提案をした。曰く、これでは地味が荒れ果てる、無代ただで広い背戸を皆借そうから、胡瓜りなり、茄子なすなり、そのかわり、実のない南瓜を刈取って雑草を抜けという。が、肥料なしに、前栽せんざいもの、実入みいりはない。二十六、七の若いものに、畠はたけいじりは第一無理だし、南瓜の蔓つるは焚たきつ附けにもならぬ。町に、隠れたる本草家があつて、その用途を伝授しても、鎌を買う資本がない、従つてかの女、いや、あの野郎の狼藉ろうぜきにまかせてあるが、跳梁跋扈ちやうりやうぼつこの凄じさは、時々切つて棄てないと、木戸を攀よじ、縁側へ這いかかる。……こんな荒地は、糸七ごときに、自おのずからの禄と見えて、一方は隣地の華族邸やしきの

厚い塀だし、一方は大きな植木屋の竹垣だし、この貸屋の背戸として、小さく囲った、まばら垣は、早く朽崩れたから杭もないのに、縁側の片隅に、がたがただけれども、南瓜の蔓が開け閉てする、その木戸が一つ附いていて、前長屋総体と区切があるから、およそ一百坪に余るのが、おのずから、糸七の背戸のようになっていいる。

(——そこへ遁げた——)

糸七は、南瓜の葉を被らんばかり、驚破といえば躍越えて遁げるつもりすすきの植木屋の竹垣について、薄の根にかくれて、蝦蟇がまのようしやがにしやが躡んで、遁げた抜けがらの巢を——窺えば——

——籠るのは、故郷から出て来て寄食している、糸七の甥の少

年で、小説家の巢に居ながら、心掛は違ふ、見上げたものの大学志願で、試験準備に、神田辺あたりの学校へ通つて、折からちようど居なかつた。

七十八歳になるただ一人、祖母ばかり。大塚の場末の——俾くるまがその辻まで来ると、もう郡部だといつて必ず賃銀の増加ましを強請ねだる——馬方の通る町筋を、奥へ引込んだ格子戸わきの、三畳の小部屋で。……ああ、他事ひとごとながらいたわしくて、記すのに筆がふるえる、遙々はるばると故郷おくにから引取られて出て来なすつても、不心得な小説孫が、式かたのごとき体装ていたらくであるから、汽車の中で睡ねむるにもその上へ白髪しらがの額を押当てて頂いた、勿体ない、鼠穴のある古ふるつ葛籠づらを、仏壇のない押入の上段うわだんに据えて、上へ、お仏像と先

祖代々の位牌いはいを飾つて、今朝も手向けた一錢蠟燭もんろうそくも、三分一が
 処で、儉約で消したしめ、糸心のあと、ちよんぼりと黒いのを背せなに、
 日だけはよく当る、そこで、破足袋やぶれたびの継ぎものをしてござつた。
 さて、その、ひよいと持つて軽く置くと、古葛籠の上へも据り
 そうな、小さな白髪の祖母おばあさんの起居たちいの様子もなしに、悉くわしく言
 えば誰が取次いだという形もなしに、土間から格子戸まで見通し
 の框かまちの板敷、取附とつきの縦四畳、框を仕切つた二枚の障子が、すつ
 と開いて、開いた、と思うと、すぐと閉つた。穴だらけの障子紙
 へ、穴から抜けたように、すらりと立つた、霧のような女の姿。
 姿を。……

ここから、南瓜の葉がくれに熟じつと覗のぞくと、霧が濃くなり露のし

たたる、水々とした濡色の島田鬘まげに、平打ひらうちがキラリとした。中洲のお京さん、一雪である。

糸七は、墓ひきと踞み、

南瓜の葉がくれ、

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。

三十四

——この破屋あばらやへ、ついぞない、何しに来たろう——
来やがったろう、と言いたくらいだ。そりの合わない……とい

うのも行き過ぎか、合うにも合わないにも妙齡としごろの女なんぞ影も
見せたことのない処へ何しに来たろう。——ああ、そうか。矢野
（弦光）の、通俗、首ったけな惚ほれかたを、台町の先生に直ぐ取
次いだところ、「好よかろう。」と笑いながらの声が掛かつた。先生
の一言だ、「好かろう。」は引受けたと同然だから、いずれ嬉し
い返事を、と弦光も待つうちに、さあ……梅雨ごろだったか、降
っていた。持崩した身は、雨にたたかれた藁わらのようになって、ど
こかの溝へ引掛ひっかり、くさり抜いた、しよびたれで、昼間は見つと
もなく長屋居いまわり廻へ顔も出せない。日が暮れて晚おそく帰ると、牛
込の料理屋から、俵くるまや夫が持つて駈かけつけたという、先生の手紙
があつて、「弦光座にあり、待つ」とおっしゃる。……飛びたい

にも、駈けたいにも、俵賃などあるんじゃない、天保銭の翼も持
 たぬ。破傘やれがさしりつぽしよりの尻端折、下駄をつまんだ素跣足すはだしが、茗荷谷みょうがだにを真ま
 つくろ
 黒に、切支丹坂下から第六天をまつしぐら。中の橋へ出て、
 牛込へ潜もぐりこ込んだ、が、ああ、後おくれた。料理屋の玄関へ俵が並
 で、からから々と、一番の幌ほろの中から、「遅いじゃないか。」先生の
 声にひやりとすると、その後から、「待っていたんですよ。」と
 いう声は、令夫人。こんな処へ御同行は、見た事、聞いた事もな
 い、と呆れた、がまた吃驚びっくり。三つ目の俵の楫棒かじぼうを上げた、幌
 に覗かれた島田の白い顔が……

……あの、お京……いやに、ひつたり俯向うつむいた……

幌の中で、どしばたして、弦光が、「辻町か、引返ひっかえして飲も

う」という時、先生の俵がちよつとあと戻りして、「矢野は酔つてる、もう帰んな。……塾のものには誰にも黙っているんだぜ。」——馬鹿にも分つた、これは、見合だ。

納つたか、悦に入つたか、氣取つたか、弦光め、それきり多しばらく日顔を見せに來ない。酒でも催促するようで癩だからこつちからは出向かずと——塾では先生にお目には掛かるが、月府、弁持、久須利、荷高の面々が列している。口留をされたほどだから話はずと。——結婚はいつだ、とその後、矢野に打撞ぶつれば、「息子は世間を知らないよ、紳士、淑女の一生の婚礼だ、引きつけで対あ妓いかたが極きまるように、そう手軽うつつろに行くものか、ははは。」と笑わらいの、何だか空虚うつつろさ。所帯氣しまで緊しまると、笑も理に落ちるかと思つたつけ。

やがて、故郷、佐賀県の田舎の実家に、整理すべき事がある、といつて、夏うち国に帰ったのが——まだ出て来ない。それについて、御縁女、相談に来せられたかな……

糸七は墓と踞み、

南瓜の葉がくれ、

尾花を透かして、

蜻蛉の目で、

覗きながら、咄嗟とっさに心むねで思ううちに、框かまちの障子の、そこに立つたお京の、あでやかに何だか寂しい姿が、棲さきが冷いように、畳をしとしと運ぶのが見えて、縁の敷居際で、すんなりと撓しなうばかり、浮腰の膝をついた。

同時に南瓜の葉が一面に波を打って、真黄色まつきいろな鷗かもめがぱつと立ち、尾花が白く、冷い泡で、糸七つらの面を叩いた。

大塚とおりの通を、舟こが漕ぎ、帆が走る……

——や、あの時にそっくりだ。そうだ、しかも八月極暑よ。去んぬる年、一葉女史を、福山町の魔窟まくつに訪ねたと同じ雑誌社の用向きで、中洲すまいの住居おとすを音信おとすれた事がある。府会議員の邸と聞いたが、場処柄ばりだろう、四枚格子の意気造り。式台で声をかけると、女中も待たず、夕顔のほんのり咲いた、肌をそのままかと思う浴衣が、青白い立姿で、蘆戸よしどの蔭へ透いて映ると、すぐ敷居しき際に——ここに今見ると同じ、支つきひざ膝の七分くれない身。紅ひ、緋ひでない、水紅とぎより淡い肉色の縮ちりめん緬めんが、片端ひらとけざまに弛ゆるんで胸へふっさりと巻

いた、背負^{しよいあげ}上の不思議な色気がまだ目に消えない。

——原稿を十四五枚、言託^{ことづ}けただけで帰ろうと思つたのを、「どうぞ、」と黙つて入つてしまつた。埃^{ほこり}だらけの足を、下駄^{ひっこ}へ引擦^すつたなり、中二階のような夏座敷へ。……団扇^{うちわ}を出したつけな、お京も持つて。さて、何を聞いたか、饒舌^{しゃべ}つたか、腰掛窓の机の前の大川の浪に皆流れた。成程、夕顔の浴衣を着た、白い顔の眉の上を、すぐに、すらすらと帆が通る……と見ただけでも、他事^{よそ}ながら、簇^{しんし}、荷高^に似内のする事に、挙動^{ふるまい}の似たのが、気咎^{とが}めして、浅間しく恥しく、我身を馬鹿と罵^のつて、何も知らないお京の待遇^{もてなし}を水にした。アイスクリームか、ぶつかきか、よくも見ないで、すたすた、どかどか、がらん、うしろを見られる極りの

悪さに、とツつき玄関の植込の敷石に蹴躓けつまずいて、ひよろ、ひよ
ろ。……

「何のぎまだ。」

心の裡うちつぶやで呟いた……

糸七は蟻と踞み。

南瓜の葉蔭に……

三十五

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。

内へ帰れば借金取、そこから一面八方塞りふさが、不義理だらけで、友達いも好い顔せず、渡って行きたい洲崎へも首尾成らず……と新大橋の真中まんなかに、ひよろ、ひよろのまままで欄干すかに縋すがって立つと、魂が中ぶらり、心得違いの氣の入れどころが顛ひっくりかえ倒かえっていたのであるから、手玉に取って、月村に空へ投出されたように思った。一雪め、小説なぞ書かなければ、雑誌編輯の用だと云つて、こんな使いはしまいものを、お京め。と、隅田の川波、渺びょうびょう々たるに、網の大きく水脚を引いたような、斜向うの岸に、月村のそれらしい、青簾あおすだれのかかった、中二階——隣に棧橋を張出した料理店か待合の庭の植込が深いから、西日を除けて日蔭の早い、その窓下の石垣いしゐを蔽おほうて、もう夕顔がほの白い……

……時であつた。簾が巻き消えに、上へ揚ると、その雪白の花が、一羽、翡翠ひすいを銜くわえた。いや、お京の口元に含んだ浅黄の団扇が一枚。大潮を真ま南みなみに上げ颯さつと吹く風とともに、その団扇がハツと落ちて、宙に涼しい昼の月影のようにひらひらとひるがえ翻ると見るうちに、水面へスツと流れて、水よりも青くすらすらと橋へ寄つた。その時悚然ぞつとして、目を閉ふいで俯向うつむいた——挨拶おしぎをしたかも知れない。——

さて何と思つたらう……その晩だつたか、あと二三日おいてだつたか、東雲しののめの朝歸りに、思わず聞いた、「こんな身体からだで、墓詣りをしてもいいだらうか。」遊女おいらんが、「仏様でしたら差支さしつかえござんすまい。御両親。」その墓は故郷にある。「お許いいなすけ婚：

「?」「いや、」一葉女史の墓だときいて、庭の垣根の常夏の花、朝涼あさすずだから萎むしぼまいと、朝顔を添えた女の志を取り受けて、築地本願寺の墓地へ詣でて、夏の草葉の茂りにも、櫛しきみのうらがれを見た覚えがある……

……とばかりで、今、今まで朧忘れをしていた、お京さんが、が、何しに来たろう。ああ、あの時の雑誌の使いの挨拶だ。

尾花を透かして、

蜻蛉の目で。……

見ていると、その縁の敷居際に膝をついたまま、こちらを視ながめたようだっけ……後姿に、そつと立った。真横の襖ふすまを越して、背戸正面に半ば開いたのが見える。角の障子の、その、隅へ隠れた

らしい。

それは居間だ。四畳半、机がある。仕事場である。が、硯すずりも机ほこりも埃だらけ、炉とは名のみ、炬燵こたつの藻抜け、吸殻ばかりで、火の気もない。

右手の一方は甥の若いのが遣り放し、散らかし放題だが、まだその方へ入ってくればよかつたものと、さながら遁出にげしたあとの城を、乗取のつとられたようなありさまで。——とにかく、来客はだし——
 一 跣足のまま、素裕すあわせのくたびれた裾を悄々しおしおとして、縁側へ——
 一 下まで蔓る南瓜の蔓で、引拭ひきぬぐうても済もうけれど、淑女の客に、そうはなるまい。台所へ廻ろうか、足を拭ふいてと、そこに居る娘ひとの、呼吸いきの氣勢けはいを、伺い伺い、縁端えんばなへ。——がらり、がち

やがちやがちやん。吃驚びつくりした。

耳元近い裏木戸が開くのと、バケツを打ぶツつけたのが一時いつときで、「やーい、けいせい買のふられ男の、意気地なしの弱虫や、花嫁さんが来たつて遁げたや、ちやツ、ちやツ、ちやツ。」

……と、みそさざいのように笑ったのは、お滝といつて、十一二、前髪を振下げた、舞みだれの蝶々まげ。色も白く、子柄もいいが、氏より育ちで長屋中のお茶ツびい。

「足をお洗いよ、さあ、ぼんやりしないで、よ、光邦みつくに様。」
けいせい買の、ふられ男の弱虫は、障子が開くと、冷汗をした。
あまつさえ、光邦様。……

五目の師匠も近所なり、近い頃氷川様の祭礼おまつりに、踊屋台の、

まさかどに、附きつきりで居てから以来、自から任じて、たきやし滝夜叉やだから扱やいにくい。

「チチーン、シヤン、チチチ、チチチン。(鼓の口真似) ポン、ポン、大宅おおやの太郎は目をさまし……ぼんやりしないでさ。」

「馬鹿、雑巾がないじゃないか。」

「まあ、この私とした事が、ほんにそうでござんした、おほほ。」
ちやツちやツ、と笑いながら、お滝が木戸をポイと出る。糸七の気早く足へ掛けたバケツの水は、南瓜にしぶいて、ばちやばちや鳴るのに、障子一重、そこのお京は、けはい氣息もしない。はじめからの様子も変だし、消えたのではないか、と足首から背筋が冷い。
きぬ衣の薫が、ほんのりと、お京がすツとそこへ出た。

三十六

慌てて、

「唯^{ただいま}今、御挨拶。」

これには、ただ身の動作^{こなし}で、返事して、

「おつかいなさいましな。」

と、すぐに糸七が腰かけた縁^{えんばな}端へ、袖摺れに、色香折敷^{かが}く屈
み腰で、手に水色の半^{ハンケチ}帕を。

「私が、あの……」

と、その半帕を足へ寄せる。

呆氣あつけに取られる。

「ね。」

「よして、よして下さい。罰が、罰が当る。」

「罰の当りますのは私の方です、私の方です。」

切せまった声して、

「——牛込の料理屋へ、跣足はだしで雨の中をおいでなさいました。あの時にも、おみあしを洗って上げたかったです。」

「何の事です、あれは先生の用で駆けつけたんです。」

「でも、それだって。」

「不可いけない不可いけない、不可いけなません。あなたの罰はともかくも、御両親の罰が当る——第一何の洒落しゃれです。」

「洒落……」

と引息に声が掠かすれて、志を払退はらいのけられたように、ひぞりもし拗すねた状さまに、身を起してお京が立った。

そこへ、お滝が飛込んで――

「あい、雑巾。あら、あら、二人とも気取ってる。バケツが引つくり返ってるじゃないの――テン、チン、嗟さが峨がやおむろの花ざかり、浮気な蝶も色かせぐ、廓くるわのものにつれられて、外めずらしき嵐山、ソレ覚えてか、きみさまの、袴も春の朧おぼろ染ぞめ、おぼろげならぬ殿ぶりを、見初みそめて、そめて、恥かしの、森の下露、思い胸むねに、」

と早饒はやしやべ舌りの一息にやってのけ、

「わあい……光邦、妖術にかかつて、宙に釣られて、ふらふらしてるよ。」

背中にひつたり、うしろ姿でお京が立ったのを、弱った糸七はくつぬぎ沓くつぬぎ脱がないから、拭いた足を、成程釣られながら、密そつと振向いて見ると、愁うれいまぶたを瞼まぶたに含めて遣瀬やるせなさそうに、持ち忘れたもののような半ハンケチ帕ハンケチが、宙に薄青く、白昼まひるの燐火おにびのように見えて、寂しさの上に凄すげいのに、すぐ目を反らして首垂うなだれた。

お滝が、ひよいと、飛んで傍そばへ来て、

「きれいなお姉ちゃん、少しお動きよ。」

「はい、動きましよう。」

と、縁をうつくしい褻つまさば捌さばき、袖の動きに半帕を持添えて、お

滝てのひらの掌へ、ひしと当てた。

「これ、雑巾のおうつりです。」

「あら、あら、私に。」

「でも新しいんですから。」

お滝は受けた半帕を、前髪に当て、額に当て、頬ほおに当て、頬ほおをほお摺すりして、肩へかけ、胸いに抱いだいた、その胸ではらりと拵しらげ、小腕を張ひつて、目を輝かして身を反らし、

「さてこそさてこそ、この旗を所持なすからは、問うに及ばず、將門まさかどが忘れがたみ、滝夜叉姫であろうがな。」

「何だ、あべこべじゃないか、違つてら。」

「チエエ、残念や、口おしや、かくなるうえは何をかつつまん、

まこと我こそ——滝夜叉なるわ。どろんどろん、」

と、あとしぎりに、

「……帯だつて出来るわ、この半帕。嬉しい！ 花嫁さん、ありがとう、お楽しみ光邦様、どろんどろん。」

木戸も閉めないで、トンと行く。

「——何とも、かとも、言いようはありません。」

すぐにお京を招じ入れた、というよりも、お京はひとりで、ものあつて誘うように、いま居た四畳半の縁の障子と、格子戸見通しの四畳を隔てた破襖やれぶすまの角柱で相合うその片隅に身を置いたし、糸七は窓下の机の、此方こなたへ、炉を前にすると同時に、いきなり頭こうべを下げて、せき込んで言ったのである。

「何とも、かとも、いいようはありません、失礼しました。」

お京は薄い桔梗色きぎょういろの襟えりを深く、俯向うつむいて、片手で胸をおさえ
て黙っていたが、島田しまだを簪かんざしで畳の上へ縫ぬいつたように手をついた。

「辻町さん……私を折檻せつかんして、折檻して下さいまし。折檻して
下さいまし。」

「何、折檻。」

「ええ。」

「折檻、あなたはおよそ折檻ということ、知っていますか。あ
なたの身で、そのおからだで折檻という言葉ことばをさえ知っています
か、本では読み話では聞いて、それは知っていらつしやるかも知
れませんが、何をいうんです。」

——おととし一昨年か、一昨さきおととし々々、この人の筆に、かくもの優しい、た
 おやかな娘に、がま蝦蟇の面つらの「べっかつこ。」、それも一つの折檻
 か、知らず、悪たれ小僧つぶての礫をぶつけた——いたずら悪戯を。
 糸七はすくむよりも、恐れるよりも、ただ、しやうぜん悄然とするの
 であつた。

三十七

上げた顔は、血が澄んで、色の白さも透通る……お京は片袖を
 膝の上に、

「何よりか、あの、何より先に、申訳がありません。あなたのお

内へお許しも受けなくて、お言葉も受けなくて、勝手に上つて来たんですもの。」

「そんな、そんな事、何、こんな内、上るにも、踏むにも、ごらんの通り、西瓜すいかの番小屋でもありやしません、南瓜畑の物置です。」

「いいえ、いいえ、私だって、幾度も、お玄関で。」

「あやまります、恐入ります。お玄関は弱り果てます。」

「おうかがいはしたんですけれど、しんとして、誰方どなたのお声も聞えませんか。」

「すぐ開き扉ど一つの内に、祖母としよりが居ますが、耳が遠い。」

「あれ、お祖母様ばあさまにも失礼な、どうしたら可いいでしょう。……そ

れに、御近所の方、おかみさんたちが多勢、井戸端にも、格子外にも、勝手口にも、そうしてあの、花嫁、花嫁。……」

「今も居ます。現に居ます、ごめんなさい。談じます。談判します、打ぶんなぐります、花嫁だなんて失礼な。」

「あれ、あなた、そんな気ではありません。極きまりが悪くて、極りが悪くて、外へ出られないもんですから、お内へ入ってかくれました。それだし、ただ、人の口の端はの串じょうだん 戯たわぶだけでも、嫁だなどど、あなたのお耳へ入ったらどうしようと、私……私を見て、庭へ出ておしまいなさいますし、私、死にたくなりました。」

と、片袖で顔をかくすと、姿も、消入る風情である。

「それが、それがです、それにわけがあるんです。何しろ、あな

たを見てからではありません、見ない前に飛出したんです、——
今申訳をします。待つて下さい。どうも、何しろ、周囲まわりが煩うるさい。」

軸物かけものも、何も無い、がらん堂の一つ道具に、机わきの柱にか
けた、真田が短銃たんづつの両提ふたつきげ。

鉄の煙管きせるはいつも座右に、いまも持つて、巻まきたばの空缶あきかんの
粉煙草ひねを捻ひねりながら、余りの事に、まだ喫すむ隙すきを見出さなかつた、
その煙管を片手に急いで立つて、机の前の肱掛窓ひじかけまどの障子を開け
ると、植木屋の竹垣つづきで、細い処むぐらを、葎むぐらくぐりに人は通う。

「——夜叉的ことう、夜叉的ことう。」

声の下に、鼻の上まで窓の外へ、二ツ目が出た。

「光邦様、何。」

ひやりと、また汗になりながら、

「かかあママおっばら々連を追おっばら払おっばらつてくれ、消おっばらしてくれよ、妖術、魔術で。」

黙まばたきつて瞬まばたきでうなずいた目が消えると、たちまち井戸端へ飛んだ

と思う、総長屋のますがたなり榎形形の空地へ水輪なりにキヤキヤと声が響

いた。

「放れ馬だよ、そら前町を、放れ馬だよ、五匹だ。放れ馬だよッ

。」

あしおと登音が、ばたばたばた、そんなにも居たかと思う。表通の出

入口へ、どつと潮のようにはし馳り退いて、居まわりがひっそりする、

と、秋空が晴れて、部屋まで青い。

畳の埃も澄んだようで、炉の灰の急な白さ。背うなきがち、首うなだれ

がちに差向つたより炉の灰にうつくしい面影が立つて、その淡い
 桔梗の無地の半襟、お納戸縦縞たてじまの袷あわせの薄色なのに、黒縹くろしゆちん珍に
 朱、藍あい、群青ぐんじよう、白びやくぐん群で、光琳こうりん模様に錦葉もみじを織つた。中
 にも真紅に燃ゆる葉は、火よりも鮮明あざやかに、ちらちらと、揺れつ
 つ灰に描かるる。

それを汚すようだから、雁首で吹溜めの吸殻を隅の方へ搔こう
 とすると、頑固な鉄が、脇明わきあけの板じめ縮緬ちりめん、緋ひの長襦袢ながじゆばんに
 危く触ろうとするから、吃驚びっくりして引込める時、引っかけて灰が
 立った。その立つ灰にも、留南木とめぎの香が芬ぶんと薫る。

覚えず、恍惚うつとりする、鼻の尖さきへ、炎が立つて、自分で摺すつた燐マ
 ツチ寸ツチにぎよつとした。が、しやにむに一服まず吸つて、はじめで、

一息吻ほつとした。

「月村さん、あなたを見て、花嫁、いや、待つて下さい。言うのはばかも憚りますが、その花嫁のわけなんです。——実は、今更何とも面目次第ありません、跣足はだしで庭へ遁にげましたのも、盟ちかつて言います。あなたのお姿を見てからではないのです。……

……聞いたばかり、聞いたばかりで腰も抜かさないので、まだしもの僥倖しあわせで飛出したんです。今しがた、あなたが、大方、この長屋の総木戸をお入んなすつた時でしょう。その頃です、唯今のお茶つぴいが、その窓から頭を出して、「花嫁が来た。」と言つたんです。——来たならば知らしておくれよ、と不断、お茶つぴいを斥候ものみ同然だったものですから、聞くか聞かないに、何とも、不ぶ

状さまを演まじました。……いま、そのわけを話しますが。……

……煙草は……それはありがたい、お嫌きらでも、お友だちがいに、すばすば。」

と妙に砕けて、変まに勢きおつて、しよげて、笑つて、すばすば。

三十八

「……また何も、ここへ友達ひっばを引張ひり出して、それに託かけるのは卑ひき怯ようですが、二月ばかり前でした。あなたなぞの前では、お話もいかがわしい悪場所の、それも獣の巢ねのような処ひっかへ引掛かつたんです。泥々に酔つて二階へ押上つて、つい蹠よろ躑げけなりに梯子はしご段だん

の欄干へつかまると、ぐらぐらします。屋台根こそぎ波を打って、下土間へ真逆まっさかに落ちようと思いました……と云った楼うちで。……障子の小間こまは残らず穴ばかり。——その一つ一つから化ものが覗いて、蛞蝓なめくじの舌を出しそうな様子ですが、ふるえるほど寒くはありませんから、まずいとして、その隅つ子の柱に凭掛よりかかって、遣手やりてという三途河さんずがわの婆さんが、蒼黒あおくろい、瘦やせた脚を突出してましてね。」

……禪ふんどしというのを……控えたらしい。

「舐なめちや取り、舐めちや取り、蚤のみだか、虱しらみだか捻ひねっています。

——あなたも、こんな、私のようなものの処へおいで下すつた因果に、何事も忘れてお聞き下さい。

その蚤だか虱だかを捻る片手間に、部屋から下ったという蕎麦の残り、伸びて、蚯蚓みみずのようにのたくるのを撮つまんじや食い、撮んじや食う。そこをまた、牙と舌を剥むきだ出して、犬です、ね、狛ちんか面つらの長い洋犬などならまだしも、尻尾を捲まきあ上げて、耳の押おつた立った、瘦せて赤剥あかはげだらけなのが喘あえぎながら掻かく食う、と云っただけでも浅ましさが——ああ、そうだ。」

糸七は煙管を落した。

「あなたの吉原の随筆は、たしか、題は『あさましきもの。』でした。私が飛んだ『ベツかツこ』をした。」

「もう、どうぞ。」

お京は膝に袖を千鳥に掛けたまま、雌浪めなみを柔やわらかに肩に打たせた。

「大目玉を頂きましたよ、先生に。」

「もうどうぞ、ご堪忍。」

「いや、お詫びは私こそ、いわばやつぱりあなたの罰です。その

「浅ましい」一つの穴で……部屋は真暗、まつくらがたがた廊下の曲角

に、ブリキ洋鉄の洋燈一つ。余り情ない、なさけ「あかりが欲しい。」……「蠟

燭代を別に出せ。」で、奈落に落ちて一夜あける、と勘定は一度

済ましたんですが、茶を一杯にも附足しの再勘定、その勘定書を、

その勘定を催促しても、わざと待たして持つて来ません。これが、

ぼると言います。あこぎ阿漕な術です。はめられたんです。といううち

に、朝直し……あそび遊蕩が二度振ぶりになって、また、前勘定、このつけ

を出されると、金が足りない、足りないどころですか、まるで始

末が出来ないのです。

——「あさましきもの」が引受けてくれました、暑いのに、破や

ぶれびようぶ

屏風びょうぶにすくんで、かびた蒲団に縮まったありさまは、人間に、

そのまま草が生えそうです。無面目むめんぼくで廊下へ顔も出せません。

けら

お螻けらの兄さん、ちと、ご運動とか云つて、「あさましきもの」に

廊下へ連出されると、トトトン、トトトンと太鼓の音。それを、

てすり

のぞ

欄干てすりから覗のぞきますとね、漬物桶おけ、炭俵と並んで、小さな堂があつ

て、子供が四五人——午うまの日でした。お稲荷講、万年講、お稲荷

さんのお初穂はつ。「お初穂よ、」といつて、女がお捻ひねりを下へ投げる

と、揃つて上を向いた。青いんだの、黄色いんだの、子供の狐の

面を五つ見た時は、欄干てすりごし越ひさしに廂へ下つた女の扱帯しごきが、真赤まっかな尻

尾に見えたんです。

その女が、これも化けた一つの欺てで、俵くるままで拵こしらえて、無事に歸かえしてくれました。が、こちらが身み震ふるいをするにつけて、立替たてかえの催促はげが烈はげしく来ます。金子かねは為替かわせで無理算段で返しましたが、はじめの客に歸りの俵たてひまで達引いた以上、情夫まぶ——情夫（苦い顔して）が一度きり馳いたちの道では、帳場はじめ、朋輩へ顔が立たぬ。今日来い、明日来い、それこそ日ぶみ、矢ぶみで。——もうこの頃では、押掛ける、引摺りに行く、連れて歸る、と決闘はたしじょう状。それが可恐おそろさに、「女が来たら、俵が見えたら、」と、お滝といひます……あのお茶つぴいに、見張を頼んで、まさか、女郎、とはいえませんかから、そこは附景氣に、「嫁が来るんだ。遠くからで

も見えたら頼むよ。」合点ものです。そいつが、今です、前刻さつぎですよ。そこから覗いて、「来たよ、花嫁。」……

一言で面くらつて、あなたのお顔も、姿も見ないで、跣足はだしで庭へ逃出した始末です。断じて、決して、あなたと知って逃げたのではありません。」

しまった！ 大家が家賃の催促でも済んだものを、馬鹿の智慧は後からで、お京のとりなしの純真さに、つい、事実をあからさまに、達引だの、いや矢ぶみだの、あさましく聞きはしないかと、舌がたちまち縮んで咽喉のどへ声の詰る処へ。

「光邦様。」

日ぶみ矢ぶみの色男の汗を流した顔を見よ。いまうわさしたそ

の窓から、お滝の蝶々鬘が、こん度は羽目板の壊れを踏んで上つたらしい。口まで出た。

「お客様の、ご馳走は。……つかいに行つて上げるわよ。」
また、冷汗だ、銭がない。

三十九

「これは、これは、おうようこそや。……今の、上り端あがばなを覗いたら、見事な駒下駄かっこがあつたでの。」

ちと以前より、ごそごそと、台所で、土瓶、炭、火箸、七輪。もの音がしていたが、すぐその一枚の扉ひらきから、七十八の祖母が、

茶盆に何か載せて出た。

これにお京のお諸礼式は、長屋に過ぎて、
瞳目どうもくに価値あたした。

「あの、お祖母様ばあさま……お祖母様。」

二声目に、やつと聞えて、

「はい、はい。」

「辻町さんに……」

「……」

「糸七さんに……」

肩身を狭く、ちよつと留めて、

「そんな事いつたつて、分りませんよ。」

「……お孫さんに。……」

「はい。」

「いろいろとお世話になります。」

「……孫めは幸^{しあわせ}福、お綺麗なお客様で、ばばが目にも枯樹に花じゃ。ほんにこの孫^この母親、わしには嫁ごじや。江戸から持つてござつての、大事にさしやつた錦絵にそのままじゃ。後の節句にも、お雛^{ひなさま}様に進ぜさした、振出しの、有^{あるへい}平、金米糖でさえ、その可愛らしいお口よごしじやろうに、山家^{やまが}在所^{ししい}の椎の実一つ、こんなもの。」

と、へぎ盆も有合さず、菜漬づかいの、小皿をそこへ、二人分。糸七は俯^{うつむ}向いた。一雪^{きみ}よ、聞け。山果庭二落^ちテ、朝^{チヨウ}二^ウノ食^{シユウ}フ^フ秋^{アキ}風^{フウ}二^ア饜^アクとは申せども、この椎の実とやがて栗は、その椎

の木も、栗の木も、背戸の奥深く真ま暗くらな大藪おおやぶの多数くちなわの蛇と、
 南瓜畑おびただの夥おびただ多だしい蝦蟇がまと、相戦しょうせんう衝しょうに当る、地境しきょうの悪所あくじょにあつ
 て、お滝へきえきの夜叉へきえきさえ辟へきえき易えきする。……小雀こがらほおじろ類ほおじろ白ほおじろも手にとまる、
 仏ぶつづくつた、祖母そぼでなくては拾ひろわれぬ。

「それからの、青紫蘇あおじそを粉こなにしたのじゃがの、毒どくにはならぬで、
 まいれ。」

と湯氣ゆけの立つ茶椀ちawan。——南無三宝なんぶさんぼう、茶ちやが切きれた。

「ほんにの、これが春はるで、餅草もちくさがあると、私わたしが手に、すぐに団子だんじ
 など拵しらえて進すすじようもの。孫まごが、ほつておきで、南瓜なつの葉はばかり
 何なににもないがの。」

と寂さびしい笑わらいの、口くちには齒はがない。

お京がいとしげに打傾き、

「お祖母様、いまに可愛い嫁菜が咲きます。」

「嫁菜がの、嬉しやの、あなたのような、のう。」

糸七は仰天した、人参のごとく真^{しん}まで染^{そま}って、

「お祖母さん、お祖母さん、お祖母さん、そんな事より、仏間へ行つて、この、きれいな、珍らしいお客様の見えた事を、父、母に話して下さい。」

「おいの、そうじゃの。」

何と思つたか、お京が急いで、さも、遠慮のないように椎の実を取つた。

「お祖母様。」

「……おお、食べてくださるかの。」

「おいしい……」

と、長いまつ毛をふるわせて、

「三度、三度、ここに居まして、ご飯のかわりに頂いたら、どんなにか嬉しいでしょう……」

と、息をふくんだ頬を削つて、ツと湧わく涙に袖を当てると、いう事も、する事も、訳は知らず誘われて、糸七も身を絞つてほろほろと出る涙を、引ひっぶる振うように炉に目を外そらした。

「喧嘩せまい、喧嘩せまい。何じや、この、孫めがまた……」

「——お祖母さん、芝居の話をしていたんです、それが悲しいもんですから。」

「それは、それは……嫁ごもの、芝居が何より好きでござったよ。たんと、ゆつくり話さつしやい。……ほんにの、お蒲団もない。道中にも、寢床にも被かぶるのなれど、よう払うてなど進ませましよう。」

祖母の立つたのを見ると斉ひとしく、糸七はびったり手をついた。

「祖としより母の失言をあやまります。」

「勿体ない。私は嬉しゆう存じました。」

と膝しざを退ひつて、礼を返して、

「辻町さん、では、失礼をいたします。」

何しに来たこの女、何を泣いたこの女、なぜ泣かせたこの女、
 権と青紫蘇の葉に懲りて、破やぶ毛れげ布つとに辟へ易きえしたろう。

黙つて、糸七が挨拶すると、悄然しよんぼりと立つた、が屹きつと胸を緊しめた。その姿に似ず、ゆるく、色めかしく、柔かな、背負しよいあげの紗綾形さやがた絞しぼりの淡紅色ときいろが、ものの打解けたようなつかで可懐なつかしい。

框かまちの障子を、膝をついて開けると、板に置いた、つつみものを手に引きつけて、居直る時、心急せいた状さまに前褻さが浅く揺れて、帯の模様もみじの緋葉もみじが散つた。

「お恥しいもんです。小さな盃は、内に久しくありました。それに、お酒をお一口。」

四十

「……………」

「私……しばらくお別れに来たんです。」

「……旅行——遠方へ。」

「いいえ。」

糸七は釈然として、胸で解けた。

「ああ、極りましたか、矢野とお約束。」

眉が一文字に、屹きつと視みて、

「あの方、お断りしてしまいました、他所よそへ嫁に参ります。」

「他所へ。……おきき申すのも変ですが。」

お京は引結んだ口元をやつと解いたように見えて、

「野土青麟とこの許へです。」

糸七は聞くより思わ^{わな}ず戦いた。あの青大将が、横笛を、臭^いきを浴びても頬が腐る、黒い舌に——この帯を、背負^{しよ}揚^あげを、襟を、島田を、緋^ひの張^{なが}襦^が袷^{じゆ}を、肌を。

「あなたが、あなたが、私を——矢野さんにお媒^な灼^{こう}なすつた事を聞きました口^く惜^やしさに——女は、何をするか私にも分りません——あなたが世の中で一番お嫌いだという青麟に、結納を済ませたんです。」

「……………」

「辻町さん、よく存じております、知っていたんです。お嫌いなさいますのも、お憎しみも分っています。いますけれど、思う方、慕^もう方が、その女を余^よ所^そへ媒^な灼^{こう}なさると聞いた時の、その女の心

は、気が違うよりほかありません。」

と蒼い顔で、また熟と視て、はつと泣きつつ、背けた背を、そのまま、土間へ早や片棲。その棲を圧えても、帯をひしと掴んで、搦まる緋が炎でも、その中の雪の手首を衝と取つても、世にげに一度は許されよう、引戻そうと、我を忘れて衝と進んだ。

「危え、危え、ええ危えというに、やい、小阿魔女め。」

「何を小癩な……チンツン」

と、目をぱつちり、ちよつと、一見得。

黒鴨の俣夫が、後から、横から、飛廻つて、喚くを構わず、

「チンツン、さすがの勇者もたじたじたじ、チチレ、トツツル、ツンツ、ツンツ、こずえ木の葉のさらさらさら、チャン、チャン、

チャンチャンラン、チャンラン、魔風とともに光邦が、襟がみつ
かんで……おほほ、ははは、ちやつちやつ、ちやつ。」

お京の姿を、框に覗くと、帰る、と見た、おしやまの、お先走
りのお茶つぴいが、木戸傍で待った俵の楯棒を自分で上げて右
左へ振りながら駆込んで来たのである。

「わかれに、……その気でいたかも知れない。」

小杯は朱塗のちよつと受口で、香炉形とも言いそうな、内側に
銀の梅の蒔絵が薫る。……薫るのなんぞ何のその、酒の冷の気を
浴びて、正宗を、壘の口の切味や、鉢も匂も金色に、梅を、
臍に湛えつつ、ぐいと飲み、ぐいと煽った——立続けた。

吻と吹く酒の香を、横状に反らしたのは、目前に歴々とする

お京の向合むきあった面影に、心遣いをしたのである。

杯を持直して、

「別れだといいました。糸七も潔く受けました。あなたも、一つ
」

弱い酒を、一時に、頭上のぼった酔に、何をいうやら。しかもひたりと坐直いなおつて、杯を、目ざすお京の姿に献さそうとして置くのが、
畳も縁へりも、炉縁も外れて、ずか、と灰の中へ突込もうとして、衝つと手を引いて、ぎよつとしたように四辺あたりを視た。

「どうかしている。」

第一に南瓜畠が暗かった。数千の葉が庭ぐるみ皆戦そよいだ。颯風はやて落来おちくと目がくらみ、頭髮ずはつが乱れた。

その時、遣場やりばに失した杯は思わず頭の真中まんなかへ載せたそうである。

一よろけ、ひよろりとして、

「——一段と烏帽子が似合いて候——」

とすつくり立った。

が、これは雪の朝、吉原を落武者の困惑を繰返したものでない。一人の友達の、かつて、深山越みやまごしの峠の茶屋で、凄じきすさま迅じんら雷らい猛雨に逢って、遁にげも、引きも、ほとんど詮術せんすべのなきに、飲みかけていた硝子盃コップを電力遮断の悲哀なる焦慮で、天窗あたまに被かぶつたというのを、改めて思出すともなく、無意識か、はた、意識してか、知らず、しかくあらしめたものである。

青麟に嫁く一言や、直ちに霹靂であつた。あたかもこの時の糸七に、屋の内八方、耳も目も、さながら大雷大風であつた。

四十一

と、突立つたまま、苦い顔、渋い顔、切ない顔、甘い顔、酔つて呆けた青い顔をしていた。が、頬へたらたらと垂れかかった酒の雫を、横舐めに、舌打して、

「鳴るは滝の水、と来るか、来たと……何だ、日は照るとも絶えずとうたりか、絶えずとうたりと、絶えずとうたり、とくとくとく立てや手束弓の。」

真似を動いて、くるくる舞ったが、打傾いて耳を聳て、

「や、囃子はやしが聞える。ええ、横笛が。笛は止せ、笛は止せ、止せ、止さないか、畜生。」

と、いうとともに、胆略も武勇もない、判官ほうがんならぬ足弱の下強力たごうりきの、ただその金剛杖こんごうづえの一棒をくらったごとく、ぐたりとなつて、畳にのめつた。

がんがんと、胸は早鐘、幽かすかにチチと耳が鳴る。

仏間にては、祖母が、さつきの言ことを真まに受けて、りんなど打つていらはしないか。この秋の取ツつきに、雷雨おびただしかりし中に、ピシャン、と物凄く響いたのを、昼寝の目を柔かに孫を視て、「軒近に桶屋が来ているかの、竹の籬たがが弾はじいたようじゃ。」

と、またうとうと寝ねむつたほど、仏になつてごぎるから、お京が今し歸つた時の俵の音など、沙汰なしで、ご存じないが。

「祖母おばあさん……」

なき父、なき母。

「私は決してお京さんに。……ただただ、青大将の女房にはしたくないんです。」

と、きちんと両手をついたかと思えば、すぐに引ひきむしりそうな手を、そのまま宙に振つて、また飛上つて、河童かっぱに被かぶつた杯をたいた。

「でんでん虫、虫。雨も風も吹かんのんに、でんでん虫、虫……」
と、狂言舞に、無性矢鱈やたらに匆歩はねある行く。

のそのそ、のそのそ、一面の南瓜の蔭から這出したものは蝦蟇
 である。とにかく、地借の輩だし、妻なしが、友だち附合の義理
 もあり、かたがた、埴生の小屋の貧旦那が、今の若さに気が
 違つたのじやあるまいか。狂い方も、蛞蝓だとペロリと呑みた
 くなつて危いが、蝸牛なら仔細あるまい、見舞おうと、おの
 おの鹿爪らしく憂慮氣に、中には——時々的事——縁へ這上つ
 たのもあつて、まじまじと見て面を並べている。

ここに不思議な事は、結びも、留めもしない、朱塗の梅の杯が
 氣狂舞に跳ねても飛んでも、迂らず、転らず、頭から落ちよう
 としないので。……ふと心附いて、墓のごとく跣んで、手もて取
 つて引く、女の黒髪が一筋、糸底を巻いて、耳から額へ細りと、

頬にさえ掛かつてゐる。

猛然として、藍染川、忍川、不忍の池の雪を思出すと、思わず震える指で、毛筋を引けば、手繰れば、扱しごけば、するすると伸び、伸びつつ、長く美しく、黒く艶やかに、芬ぶんと薫つて、手繰り集めた杯の裡うちが、光るばかりに漆を刷はく。と見ると、毛先がおのずから動いて、杯の縁を刎はね、灰に染めじ、と思う糸七の袖に弛ゆるく掛かりながら、すらすらと濡縁へ靡なびいたのである。

この瞬間、誰が、その藍染川、忍川、不忍の池を眺めた雪の糸桜を憶おもい起おこさずにいられよう。

見る見る、黒髪に散る雪が、輝く膚はだを露呈あらわして、再び、あの淡と紅色きいろの紗綾形さやがたの、品よく和やかに、情ありげな背負揚が解け、襟

が開け緋が乱れて、石鹼シヤボンの香を聞いてさえ、身に沁しみみた雪を欺あざむく肩を、胸を、腕かいなを……青大将の黒い歯が、黒い唾が、黒い舌が。

糸七は拳こぶしを固めて宙を打った——「この狂人きちがい」——「悪魔が憑ついたか、狂わすか、しまったり」……と叫びつつ、蝦蟇を驚かしつつ、敷きわがね、伸び靡ひとすじいた、一条の黒髪の上を、光琳の錦を敷いた木の葉こちらしの帯の上のごとく、転々として転げ倒れた。

「光邦様、光邦様。」

ぎよつとすると、お滝夜叉。

「あい、お手紙。ほら、さつき来たんだけれどね、ね、花嫁が妬や

くと悪いから預つといたのよ、えらいでしょう。……女の人の手紙なんですもの。」

——お伽堂、時より——で、都合で帰郷する事になり、それに
つけ、いつぞや、『たそがれ』など、あなたを大のご鼻^{ひいき}眞の、中
坂下のお娘^{きんす}ごのお達引で、金子、珊瑚^{さんご}の釵^{かんざし}の、ご心配はもうなく
なりましたと申したのは、実は中洲、月村様のお厚^{こころざし}情。京子
様、その事堅くお口どめゆえ、秘^{かく}してはおりましたが、このたび
帰国の上は、かれこれ、打明けます折もつい伸^{のびのび}々と心苦しく、
お京様とは幾久しきおつきあい、何かにつけ、お胸にそのお含み、
なによりと存じ……………

——もう可^いい。

——(完)

作者自から評して云う、この（結び）には拵えた作意がある。誰方にもよく解る。……お滝が手紙を渡す条すじである。纏まとりがいいようにと思つたが、見えすいた筋立らしい、こんな事はしないが好いい。——実は、お伽堂の女房の手紙が糸七に届いたのは、過ぐることに二月ばかり、お京さんと、野土青鱗（あおだいしようめ）画伯と、結婚式の済んだ後だったのだそうである。

昭和十四（一九三九）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成10」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年7月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2008年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

薄紅梅

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>